

第8回日本混合研究法学会年次大会 抄録集

混合研究法による知の結晶



2022年10月15日-16日

オンライン開催（秋田大学）

目次

Pg. 1	大会長あいさつ
Pg. 2	実行委員長あいさつ
Pg. 3-4	日程表
Pg. 5-6	参加者へのご案内
Pg. 7-8	大会長講演
Pg. 9	基調講演 1
Pg. 10-11	基調講演 2
Pg. 12	招待講演
Pg. 13-14	パネルディスカッション
Pg. 15-16	特別講演
Pg. 17-20	MMR オープンフォーラム
Pg. 21-22	ワークショップ
Pg. 23-24	口頭発表一覧
Pg. 25	ポスター発表一覧
Pg. 26	科研特別報告一覧
Pg. 27-34	口頭発表抄録（8 本）
Pg. 35-36	ポスター発表抄録（2 本）
Pg. 37-40	科研特別報告抄録（4 本）

大会長あいさつ

大会長 稲葉 光行
(立命館大学／日本混合研究法学会理事長)

2015 年に創立された日本混合研究法学会は、国際混合研究法学会（Mixed Methods International Research Association: MMIRA）のアフィリエート団体としても認められている、混合研究法の普及・促進を掲げる国内で唯一の学会組織です。これまで、国内大会を毎年、国際大会（MMIRA アジア地域会議）を隔年で開催することで、日本、アジア、および世界各国の混合研究法コミュニティをつなぐハブ的な役割を果たして参りました。

学会創立から現在までの社会の動きを見ると、健康・福祉・教育・環境などに関わる複雑で多様な社会的課題が山積している中で、さらに COVID-19 の世界的な感染拡大を受け、我々の社会・経済・制度の脆弱な部分が顕在化されたと言えるでしょう。そしてその脆弱な部分を理解し、改善のヒントを得るために、量的・質的なアプローチの統合によって従来知り得なかった知見を得ようとする混合研究法の重要性がますます高まっていると思われます。また社会の大きな動向を捉えるビッグデータが利用可能になった現代において、様々な視覚ツールを駆使することで、質・量的データの背後にある問題を発見し、解決のヒントを得ることを可能にする混合研究法への期待が高まって言っていると考えます。

このような、混合研究法を取り巻く社会変化の中で、今年度の大会では、混合研究法が目指している原点に立ち戻りつつ、さまざまな視点や新しい手法を駆使し、社会的課題の解決のヒントとしての「知の結晶」を創り出すという混合研究法のエッセンスを再考することを目指しております。

そのため本大会の 1 日目は、混合研究法の根幹に関わる話題について、亀井智子先生、ジョン・クレスウェル先生、廣瀬眞理子先生によるご講演をいただきます。2 日目には、混合研究法の実践や学習におけるハードルに関わって、アティシャン・ヨーナス先生によるご講演、および抱井尚子先生がファシリテートとする MMR オープンフォーラムを開催いたします。さらに、ポール・チャンダナブーンマ先生による、コミュニティ・ベースの混合研究法という先進的な方法論に関するワークショップも予定されております。

このように本大会は、国内外から登壇者をお招きし、混合研究法の原点から応用に至るまでの話題を提供させて頂く予定であります。そして多様なレベルの混合研究法研究者が議論に参加し、複雑な社会的課題の理解や解決に向かうためのヒントを得ることができる場の実現を目指しております。

COVID-19 感染拡大防止のためにオンライン開催となり、皆様に直接お会いできることは残念ではございますが、地理的制約を超えて、混合研究法に興味を持つ国内外の様々な方々とバーチャルにつながる形で、活発な議論ができるることを大変楽しみにしております。

実行委員長あいさつ

実行委員長 真壁 幸子
(秋田大学)

皆様、本学術集会にご参加いただき本当にありがとうございます。今年度もオンラインでの運用となりました。来年度こそはリアルな対面で、お会いできることを祈っております。

この度、実行委員長をさせていただいております眞壁は看護研究者です。看護では、常に、患者個々の主観的視点と、検査データなどによる客観的視点を行き来しつつ、患者を包括的に理解し、最善のケアを提供します。看護実践は、元々このような特徴を有するため、看護研究者にとって混合研究法は相性がとても良いと思っています。しかし、国際的にもいまだ新しい研究手法であるため、自身の研究技能として獲得することに難儀している看護研究者が多くいます。もちろん今大会は看護研究者のみの集まりではなく、多くの異なる専門領域からの研究者が、「方法論を議論する」という共通目的のもと、学際性豊かに集まっています。しかし、混合研究法に熟達した研究者のみならず、私も含めた本研究手法を自分のものとして獲得したい研究者にとっても有意義な場となるよう、本大会を準備してきました。

今回、「雪の結晶」と「知の結晶」を関連させています。雪の結晶は、すばらしく構造化されていますが、唯一無二のものです。分子レベルでみますと同じものはないのです。ダイヤモンド以上の輝きをもちます。管理がよければその結晶は溶けずにその形を維持できます。溶けてもまた新たな結晶を構築できます。意図的に溶かして他と混ぜて新たな結晶を作り出すこともできるでしょう。この過程や、成果としての巧みな構造や美しさは、混合研究法の哲学そのものと考えます。

最後に「秋田」の話をしますと、私は鹿児島と秋田の血を受けて、秋田で育った人間です。秋田では、日本で最も多くの健康問題を目の当たりにしています。秋田だからこそこの解決策を生み出すことに喜びを感じて日々研究活動を行っております。本学術集会を運営させていただくことに感謝するとともに、今回参加された方々が、実際に秋田の素晴らしい風景や食事に出会うことができなかつたことを残念に思いつつも、すこしでも、大会中に秋田を感じていただけましたら光栄です。

第 8 回日本混合研究法学会年次大会

【10月15日(土) 1日目】

時間	会場 (Zoom)	イベント
8:40		開場(Zoom ログイン可能)
9:00-9:20	Room.1	開会式 大会長: 稲葉 光行 実行委員長: 真壁 幸子
9:20-9:50	Room.1	大会長講演 混合研究法による知の結晶 講演者: 稲葉 光行
9:50-10:00		休憩
10:00-10:40	Room.1	基調講演 1 混合研究法発展への期待 講演者: 亀井 智子
10:40-10:50		休憩
10:50-11:30	Room.1	基調講演 2 質的研究の国際的視点『質的研究をはじめるための 30 の基礎スキル』 講演者: John W. Creswell
11:30-11:40		休憩
11:40-12:40	Room.1	口頭発表 セッション 1
	Room.2	口頭発表 セッション 2
12:40-13:40		学会総会 Room.5(Zoom)／休憩
13:40-14:20	Room.1	招待講演 混合型研究のクオリティ（質）の基準を実証研究に適用する 講演者: 廣瀬 真理子
14:20-14:30		休憩
14:30-16:00	Room.1	パネルディスカッション 混合型研究の実施と評価 ～Hirose & Creswell (2022)の 6 つの規準を落とし込む～ 企画・登壇者: 成田 慶一、八田 太一、廣瀬 真理子
16:00-16:10		休憩／バーチャル懇談会参加者は Room.6 へ移動
16:10-18:00	Room.6	バーチャル懇談会

【10月16日(日) 2日目】

時間	会場 (Zoom)	イベント
8:40		開場(Zoom ログイン可能)
9:00-10:00	Room.1	口頭発表 セッション 3
	Room.2	口頭発表 セッション 4
	Room.3	ポスター セッション (9:00~9:40)
	Room.4	科研特別報告 セッション
10:00-10:10		休憩
10:10-10:50	Room.1	特別講演 厳密な混合研究法の実施における困難と概念化・方法論的課題の克服のためのストラテジー 講演者: Ahtisham Younas
10:50-11:00		休憩
11:00-12:30	Room.1	MMR オープンフォーラム 研究者に立ちはだかる MMR の壁 ファシリテーター: 抱井 尚子 話題提供者: 木元 稔、前原 和明、山田 典子
12:30-13:15		休憩
13:15-14:45	Room.1	ワークショップ 健康公平性の推進のための「混合研究法によるコミュニティベース参加型研究(MMCBPR)」の活用 講師: P. Paul Chandanabhumma
14:45-14:55	Room.1	閉会式

【10月15日(土) 1日目・16日(日) 2日目】

Room.7 (Web)	ポスター発表内容の掲示
Room.8 (Web)	企業展示

参加者へのご案内

1. 参加登録

- ・本大会の参加には、以下のページでの事前参加登録が必要です。
(登録締切：大会前日10月14日（金）の23:59（日本時間）まで)
【大会参加申込ページ】
<http://www.jsmmr.org/conference/jsmmr2022/>

- ・大会参加費は以下のとおりです。

項目	金額
大会参加費（日本混合研究法学会 正会員）	5,000円
大会参加費（日本混合研究法学会 学生会員・シニア会員）	2,000円
大会参加費（非会員 一般）	15,000円
大会参加費（非会員 学生）	6,000円

2. 参加準備

- ・本大会の参加（ログイン）には、大会参加用ユーザ名とパスワードが必要です。
- ・ユーザ名・パスワードは、参加登録の際に入力したEメールアドレスにお送りします。大会参加（ログイン）の前に、ユーザ名とパスワードをご用意ください。
- ・参加登録後、ユーザ名・パスワードを紛失された方は、大会事務局
(jsmmr2022office@gmail.com)までご連絡ください。

3. 会場

- ・以下が、各会場と開室時間です。

会場名	内容	形式	開室時間
【Room.1】	メインプログラム ・講演・パネルディスカッション ・オープンフォーラム・口頭発表セッション1、3	Zoom	①10月15日(土) 8:40-16:10 ②10月16日(日) 8:40-15:00
【Room.2】	口頭発表セッション2、4	Zoom	①10月15日(土) 11:40-12:40 ②10月16日(日) 9:00-10:00
【Room.3】	ポスターセッション	Zoom	10月16日(日) 9:00-9:40
【Room.4】	科研特別報告セッション	Zoom	10月16日(日) 9:00-10:00
【Room.5】	日本混合研究法学会 ・2022年度年次総会	Zoom	10月15日(土) 12:40-13:40
【Room.6】	バーチャル懇談会	Zoom	10月15日(土) 16:10-18:00
【Room.7】	ポスター発表内容の掲示	Web	大会3日前から大会期間中
【Room.8】	企業展示	Web	大会期間中

- ・大会当日は、大会ホームページの【入場】ボタンをクリックし、大会参加用ユーザ名・パスワードを入力してください。その後、各会場のアイコンをクリックすれば入室できます。
- ・【Room.1】～【Room.6】の入室にはZoomが必要です。Zoomがインストールされていない機器でアクセスした場合、会場に入る前にインストールプログラムが起動されますので、指示に従ってインストールを行ってください。

4. メインプログラム【Room.1 (Zoom)】

- ・発言をする時以外は、Zoomのマイクをミュートに、ビデオをオフにしてください。
- ・発表者への質疑応答については、座長の指示に従ってください。
- ・発表者の許可なく撮影（キャプチャー）・録画・録音をすることを禁止します。

5. 口頭発表・ポスター・科研特別報告セッション【Room.1~4 (Zoom)】

- ・大会期間中に各会場にて発表時間を設けます。
- ・発言をする時以外は、Zoomのマイクをミュートに、ビデオをオフにしてください。
- ・発表者への質疑応答については、座長の指示に従ってください。
- ・発表者の許可なく撮影（キャプチャー）・録画・録音をすることを禁止します。

6. 企業展示【Room.8 (Web)】

- ・企業広告は、大会期間中、Room.8 (Web) に展示されています。
- ・研究法に関する書籍などをオンラインでご購入いただける企業もいくつかございます。ぜひ活用ください。
- ・質問がある場合、広告に掲載されている展示企業の連絡先に直接ご連絡ください。

7. バーチャル懇談会【Room.6 (Zoom)】

- ・10月15日（土）16時10分より、Room.6 (Zoom) でバーチャル懇談会を開催します。
- ・講演、口頭発表、およびポスター発表をされた方々との情報交換ができますので、ぜひご参加下さい。懇談会参加費は無料です。
- ・大会参加者は事前申込みなく参加可能です
- ・入室時には、Zoomの表示名をご自身の名前（ご所属）に変更をおねがいします。また、参加にあたっては、事前に名刺型バーチャル背景を作成し、それを背景に設定することにご協力ください。
- ・名刺型バーチャル背景の作成は、以下のサイトなどにおいて無料でできます。
- ・zoome (<https://zoom.social-business-card.com/>) バーチャル背景の変更方法については、サイトをご覧ください。
- ・なお、本大会では、このバーチャル懇談会を発表内容に関する情報交換のための貴重な時間と位置付けています。そのため、発表者はバーチャル背景等を用いて、今大会の発表者である等を示し、参加者間で積極的な情報交換を行うようにしてください。

8. 学会総会（会員のみ）【Room.5 (Zoom)】

- ・10月15日（土）12時40分～13時40分にRoom.5 (Zoom) にて総会が行われます。
- ・学会の運営や方針決定に関わる場ですので、会員の方はぜひご参加ください。

1日目午前

大会長講演

10月15日（土）9:20-9:50

Room.1 (Zoom)

司会：前原 和明（秋田大学）

講演者：**稲葉 光行**（立命館大学）

混合研究法による知の結晶

近年、混合研究法において、データマイニングやテキストマイニングによるビッグデータ解析、あるいは社会ネットワーク分析や地理情報システムなど質・量のハイブリッドなデータに対する混合型分析が取りあげられるなど、データソースや分析枠組みについての議論が多様化している。これらの議論の中では、データ分析の迅速化だけでなく、視覚表現に基づく統合やメタ推論の導出の可能性に関する注目が高まっている。実際、研究デザイン・分析・報告、あるいはメタ推論の導出を支援するジョイントディスプレイやビジュアルディスプレイといった道具の活用事例を紹介する論文・書籍やワークショップ等も増えている。このような背景から、本発表では、ジョイントディスプレイやビジュアルディスプレイなどの視覚表現に着目し、本大会のテーマである「混合研究法による知の結晶」がどのような過程を通して可能であるかを考察する。

具体的には、混合研究法の実践において、研究者が視覚表現と対話しながらメタ推論を導出する過程を、ナレッジマネジメントの源流とされる「知識創造」(野中・紺野, 2003)の枠組みを援用して検討する。ジョイントディスプレイを通した視覚表現に基づくメタ推論の導出は、数値や言葉で表わされる「形式知」と、明示的に表現できない「暗黙知」が反復的に変換されるサイクルによって、知識が「結晶化」されるプロセスであると捉えることができる。また知識創造においては、データに基づく帰納に加え、アブダクション（仮説推論）の思考が重要であるとされるが、混合研究法における視覚表現は、研究者によるアブダクションを促進する上での有用な道具であると考えられる。

本発表では、知識創造の理論を手かがりとしつつ、視覚表現に対する反復的な考察を経てメタ推論の導出を目指す「グラウンデッドなテキストマイニング・アプローチ: GTxA」(Inaba & Kakai, in press) をはじめ、視覚表現を活用した混合研究法の事例を紹介する。そして、混合研究法を用いる研究者が、ジョイントディスプレイとの対話によって新たな洞察を得る過程への理解を深めることを目指す。

Inaba, M., & Kakai, H., (in press). *Grounded Text Mining Approach: An Integration Strategy of Grounded Theory and Textual Data Mining, The Sage Handbook of Mixed Methods Research Design*. SAGE.

野中郁次郎・紺野登. (2003). 知識創造の方法論 東洋経済新報社.



稻葉 光行 Mitsuyuki INABA, Ph.D

立命館大学政策科学部教授。日本混合研究法学会理事（2015～）、同学会理事長（2019～）。専門は情報科学・学習科学。混合研究法に関する著書の分担執筆として『The Sage Handbook of Mixed Methods Research Design (SAGE, in press)』、『混合研究法の手引き—トレジャーハントで学ぶ研究デザインから論文の書き方まで』(遠見書房, 2021)などがある。

1日目午前

基調講演 1

10月15日（土）10:00-10:40

Room.1 (Zoom)

司会：野崎 真奈美（順天堂大学）

講演者：**亀井 智子**（聖路加国際大学）

混合研究法発展への期待

看護学は、健康問題とともに生きる人々の複雑な現象を扱うことが多い。その人の心身社会的状態や家族・地域環境など多様な情報を広く集め、何が生じているのか系統的に評価・推論して、その後フォーカスを絞って具体的ケアのストラテジーをたてていく。そのため、常に量的情報（データ）と質的情報（データ）に深く対峙する目をもち、両者を混ぜ合わせ（統合）ながら思考を最大に広げ、その後、それとは逆に焦点化するプロセスを繰り返す。このプロセスは、混合研究法に通じる思考であると考えている。

現在、青山学院大学 抱井尚子教授の研究プロジェクトへの参画の機会を得て、わが国の看護学研究者の特性を理解し、混合研究法の教育プログラム作成に向けた調査を多分野の研究者と協働している。その中で、看護学教育では、混合研究法の教育者の不足、日本語教材の不足、初学者や自信のない研究者へのサポートの必要性などが明確化している。これらは、他分野にも通じる可能性があると推察される。

健全な混合研究法の発展のためには、研究の自由と自由な発想の両者を促進し、醸成する環境が大切である。混合研究法コミュニティは、分野を超えた研究者が共に方法論を学び、探し続け、後進者の育成を図ることが必須であると考えている。とくに、若手研究者との対話によって、新しいアイディアを引き出すとともに、混合研究法の先駆者達が多く示唆を示しているように、性質の異なるデータの収集や統合と推論のプロセスをさらに具体的化し、確立することが必要ではないか。分野のみならず、世代を超えて皆が方法論的発展に寄与するコミュニティづくり、そして、その成果を発信する場としての学会誌「混合研究法 *Annals of Mixed Methods Research*」の両者が混合研究法の発展にとって欠かすことができないと考えている。

亀井 智子 Tomoko KAMEI, Ph.D



保健師、看護師の実務経験後、東京医科歯科大学医学部保健衛生学科助手、講師、聖路加国際大学助教授を経て 2007 年から現職。日本混合研究法学会理事、混合研究法 *Annals of Mixed Methods* 編集委員長。日本在宅ケア学会理事長、日本在宅ケア教育研究センター長、日本看護科学学会理事、日本在宅ケアアライアンス理事、日本世代間交流学会理事などを務める。混合研究法の中でも、縦断的収斂デザインを用いた看護研究に关心をもち、取り組んでいる。

1日目午前

基調講演 2

10月15日（土）10:50-11:30

Room.1 (Zoom)

司会：河村 洋子（産業医科大学）

講演者：**John W. Creswell** (ミシガン大学)

An International Perspective on Qualitative Research: The SAGE 30 Essential Skills for the Qualitative Researcher

There is a growing agreement about procedures internationally for conducting qualitative research. These procedures are available in the *American Psychological Association Publication Manual (2020)*. Because this manual is used in social and health sciences and followed worldwide, we can refer to its standards for the qualitative strand of our mixed methods projects. In my new book, “*30 Essential Skills for the Qualitative Researchers* (SAGE, 2e, Creswell & Baez, 2021). I follow the APA standards. I also extend the discussion to practical approaches I have used for conducting qualitative and mixed methods studies during my 40-year academic career. This SAGE book is now available in a Japanese translation (Dr. Hirose, translator). In this presentation, I will highlight key applications readers have found most useful (and challenging) in this book. These include: thinking like a qualitative researcher, managing difficult emotions that come up during research, using philosophy and theory in qualitative research, scripting a qualitative purpose statement and research questions, designing and administering an interview protocol, coding text data, writing reflexively, and criteria for a good qualitative study. These topics will be introduced with a) a sensitivity to the Japanese context and b) their connection in the qualitative strand of a mixed methods research study. The PowerPoint presentation will be delivered in English, assisted by a Japanese translator (Dr. Mariko Hirose).

質的研究の国際的視点『質的研究をはじめるための 30 の基礎スキル』

質的研究の実施手順に関する国際的な合意形成が進められている。これらの手順は『アメリカ心理学会 (APA) 執筆マニュアル』(2020) に掲載されている。このマニュアルは、社会科学や健康科学の領域で使用され、世界中で用いられているものであり、混合研究法プロジェクトの質的研究の部分についてはこの規準を参照することができる。私の新刊『*30 Essential Skills for the Qualitative Researchers*』(SAGE, 2e, Creswell & Baez, 2021) も、この APA 規準に

従っている。またこの書籍は、私の40年にわたるアカデミック・キャリアにおいて、質的研究および混合型研究を行う際に用いてきた実践的なアプローチにも議論を広げている。現在、SAGEの英語原著の日本語訳として、『質的研究をはじめるための30の基礎スキル—おさえとおきたい実践の手引き』（新曜社、廣瀬眞理子訳、2022）が出版されている。本講演では、読者が最も有用（かつ困難）であると感じた主要な応用例について紹介する。それらには、質的研究者のように考えること、研究の中で生じる難しい感情の管理、質的研究における哲学と理論の活用、質的研究の目的とリサーチクエスチョンの記述、インタビュープロトコルの設計と実施、テキストデータのコーディング、省察的な執筆、優れた質的研究の規準、などが含まれる。これらの話題は、日本の文脈に配慮し、混合研究法と質的研究の関連性を考慮した形で紹介される。パワーポイントによるプレゼンテーションは英語で行われ、日本語の通訳が付く（廣瀬眞理子氏担当）。



ジョン・W・クレスウェル

John W. Creswell, Ph.D

Dr. Creswell is a Senior Research Scientist of the Michigan Mixed Methods Program. He has authored 32 books on research methods. He co-founded SAGE's *Journal of Mixed Methods Research*, was a Senior Fulbright Scholar, and co-led a National Institute of Health working group on mixed methods research. In 2014, he served as a Visiting Professor at Harvard's School of Public Health, and received an honorary doctorate from the University of Pretoria, South Africa. In 2015, he joined the Michigan Mixed Methods Program. He has

contributed to JSMMR conferences. Updates on his work can be found on his website:

johnwcreswell.com.

クレスウェル氏は、ミシガン混合研究法プログラム上級研究員である。研究方法に関する32冊の本を執筆している。SAGEの*Journal of Mixed Methods Research*を共同で創刊し、フルブライト上級研究員、国立衛生研究所の混合法研究に関するワーキンググループを共同主宰した。2014年、ハーバード大学公衆衛生大学院の客員教授を務め、南アフリカ・プレトリア大学から名誉博士号を授与された。2015年、ミシガン州混合研究法プログラムに参加。これまでにJSMMRのカンファレンスで登壇してきた。

研究の最新情報は、彼のウェブサイト：johnwcreswell.comで見ることができる。

1日目午後

招待講演

10月16日（土）13:40-14:20

Room.1 (Zoom)

司会：福田 美和子（目白大学）

講演者：**廣瀬 真理子**（関西学院大学）

混合型研究のクオリティ（質）の基準を実証研究に適用する

混合型研究におけるクオリティ（質）に対する評価基準については、これまで混合研究法の研究者によりさまざまな議論がなされてきた。また本学会年次大会（2019）でも取り上げられてきたトピックであるので関心をお持ちの方も多いだろう。近年の混合研究法への学問領域を超えた関心の高まりを考えると、混合型研究における質の基準は、'in house'だけではなく、多様な視点（ステークホルダーや職能団体など）を取り込む必要があると考えられる。また、新しく混合研究法に取り組もうと考える研究者にとって、研究の質を理解するための基準は大変重要なトピックだ。

本講演では、2022年5月に *Journal of Mixed Methods Research (JMMR)* より刊行された論文 (Hirose & Creswell, 2022) を取り上げ、混合型研究のクオリティ（質）の評価基準に関する多様な最近の情報ソースから合成された 6 つの基準のショートリストを紹介する。次にこのショートリストを、日本における青年期発達障害者の家族を対象とした行動支援プログラムの開発及び実践の効果を検討した実証研究（廣瀬, 2018）に適用する。これらの取り組みをとおして、混合法研究の分野での新しい研究者に不可欠な基準を具体的に示したいと考える。

Hirose, M., & Creswell, J.W. (2022). Applying Core Quality Criteria of Mixed Methods Research to an Empirical Study. *Journal of Mixed Methods Research* 2022, Vol. 0(0) 1-17

廣瀬真理子 (2018) 混合研究法をもちいた青年期発達障害の家族のための行動支援プログラムの開発と効果の検討—自治体と協働する地域発達支援—関西学院大学大学院文学研究科博士論文

廣瀬真理子 Mariko HIROSE, Ph.D



関西学院大学非常勤講師、文学部心理科学実践センター相談員。関西学院大学大学院博士課程修了、博士（心理学）。公認心理師。青年期の発達障害者の家族のためのポジティブ行動支援を核としたコミュニティ支援を実践。質的ならびに混合研究法に関しては、訳書に『質的研究をはじめるための30の基礎スキル—おさえておきたい実践の手引き』（新曜社, 2022）、共著書に『TEAにおける対人援助プロセスの分岐と記述』（誠信書房, 2022）、『なるほど！心理学面接法』（北大路書房, 2019）などがある。

1日目午後 パネルディスカッション

10月15日(土) 14:30-16:00
Room.1(Zoom)

混合型研究の実施と評価 ～Hirose & Creswell (2022)の6つの規準を落とし込む～

企画・登壇者： 成田 慶一（京都大学）
八田 太一（静岡社会健康医学大学院大学）
廣瀬 真理子（関西学院大学）

内容

混合研究法（Mixed Methods Research）は、量的アプローチと質的アプローチを統合させる第三の研究方法論として登場し、健康科学や社会科学の研究課題を中心に用いられている。統合を実現させるということは、その研究において量的アプローチと質的アプローチが持つお互いの強みを生かし弱みを相殺することに他ならない。混合研究法の概念は、その質評価にもつながる。Hirose & Creswell (2022)は混合型研究の質を評価するための6つの規準として、混合研究法を用いる合理性、量・質・混合のリサーチクエスチョン、量と質に分けられたデータ、混合研究法のデザインとダイアグラム、ジョイントディスプレイでの統合、メタ推論を挙げている。これらの規準は、出版済みの研究を評価する際に用いるだけでなく、混合型研究を計画し実践する際にも参照されるべきものである。しかしながら、混合研究法に馴染みのない研究者や実践家にとって、一つ一つの規準を理解することは容易ではなく、混合研究法の学習者であっても、自分の理解を言語化することは容易ではないだろう。

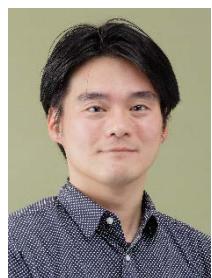
本企画では、参加者から混合研究法に関する質問や意見を受け、それらに基づいた方法論的議論を展開し、6つの規準の意味やつながりを検討する場としたい。

Hirose, M., & Creswell, J.W., (2022) *Applying Core Quality Criteria of Mixed Methods Research to an Empirical Study. Journal of Mixed Methods Research, online first.*



成田 慶一
Keiichi NARITA, Ph.D

京都大学大学院医学研究科 客員研究員、日本混合研究法学会理事(2015~)、*Methods in Psychology* 編集委員(2021.12~)。八田氏と共に MORE-IC プロジェクトを 2008 年に立ち上げ、現在に至るまで Multi-Methods、Mixed Methods を用いた臨床研究・観察研究・研究支援に複数従事。



八田 太一
Taichi HATTA, Ph.D

静岡社会健康医学大学院大学 講師（混合研究法・生命倫理）、日本混合研究法学会理事(2015~)、国際混合研究法学会理事(2019.8~2022.7)。混合研究法を用いたインフォームド・コンセント観察研究にて、2019 年医学博士号取得（京都大学）。同研究は *Journal of Mixed Methods Research* に収載され、2022 MMIRA Dissertation Award（特別賞）に選出された。



廣瀬 真理子
Mariko HIROSE, Ph.D

関西学院大学非常勤講師、文学部心理科学実践センター相談員。関西学院大学大学院博士課程修了、博士（心理学）。公認心理師。青年期の発達障害者の家族のためのポジティブ行動支援を核としたコミュニケーション支援を実践。質的ならびに混合研究法に関しては、訳書に『質的研究をはじめるための 30 の基礎スキル—おさえておきたい実践の手引き』（新曜社, 2022）、共著書に『TEAにおける対人援助プロセスの分岐と記述』（誠信書房, 2022）、『なるほど！心理学面接法』（北大路書房, 2019）などがある。

2日目午前

特別講演

10月16日(日) 10:10-10:50

Room.1(Zoom)

司会:真壁 幸子(秋田大学)

講演者 : **Ahtisham Younas** (ニューファンドランドメモリアル大学)

Challenges to Conducting Rigorous Mixed Methods Research and Strategies to Overcome Conceptualization and Methodological Challenges

The use of mixed methods research for studying health, behavioral, and social phenomena is growing. Nevertheless, conceptualizing and conducting rigorous mixed methods research can be daunting to both expert and novice researchers due to the complexity in design, analysis, integration, and interpretation of qualitative and quantitative datasets. The purpose of this presentation is to outline six key challenges in designing and conducting rigorous mixed methods studies and offer strategies to overcome these challenges. The six challenges include: question/purpose writing, design identification, sequence, strategic integration, sample and selection, and CDE (confirmed, expanded, and discordance) reporting. These six challenges should be addressed in an interrelated manner. To overcome these challenges, strategies are drawn from mixed methods literature and personal experiences of conducting mixed methods studies. A decision tree is also shared to identify various integration procedure to tackle the sequence and strategic integration challenge. Practical examples of published mixed methods studies are shared to illustrate the challenges and strategies.

厳密な混合研究法の実施における困難と概念化・方法論的課題の克服のためのストラテジー

健康、行動、社会現象を研究するために混合法研究の利用が拡大している。しかしながら、質的・量的データセットのデザイン、分析、統合、解釈の複雑さから、厳密な混合研究法を概念化し実施することは、専門家・初心者の双方にとっても困難な場合がある。本発表の目的は、厳密な混合研究法の設計と実施における 6 つの主要な課題を概説し、これらの課題を克服するための戦略を提供することである。6 つの課題とは、質問／目的の記述、デザインの特定、順序、戦略的統合、サンプルと選択、CDE(確認／Confirmed、拡張／Expanded、および 不一致／Discordance) の報告である。この 6 つの課題は、相互に関連しながら取り組む必要があるものである。困難を克服するため、混合研究法の文献と、混合研究法を実施した個人的な経験から戦略を導き出す。また、順次的・戦略的統合における課題に関する手順を決めるための決定木 (decision tree) を紹介する。さらに、ここでの課題と戦略の説明のために、これまでに発表された混合研究法の実践例を共有する。



アティシャン ヨーナス
Ahtisham Younas, Ph.D

Ahtisham Younas is an Assistant Professor in the Faculty of Nursing at Memorial University of Newfoundland, Canada. Ahtisham is the co-Founder of Nursing Research Society of Pakistan. He is the Co-Editor in Chief of *Creative Nursing journal* and *the Health Sciences Research and Theory Journal* published by the Nursing Research Society of Pakistan. Ahtisham's research focuses on mixed methods and research methods, marginalized populations, compassion, and implementation science. In his research, Ahtisham has used exploratory sequential and convergent designs and also published several methods paper such as the pathway building technique, addressing discordance in mixed methods, and the Tripartite Analysis technique.

アティシャン ヨーナス氏は、カナダ、ニューファンドランド&モリアル大学看護学部助教。パキスタンの看護研究学会の共同設立者。パキスタン看護研究学会が発行する *Creative Nursing* 誌と *Health Sciences Research and Theory* 誌の共同編集長を務めている。研究テーマは、混合研究法、疎外された人々、思いやり、そして実践科学である。また、パスウェイ構築法、混合研究における不一致への対処法、三者間分析法など、いくつかの方法論に関する研究業績がある。

2日目午前

MMR オープンフォーラム

10月16日(日) 11:00-12:30

Room.1(Zoom)

研究者に立ちはだかる MMR の壁

企画・司会： 真壁 幸子 (秋田大学)

ファシリテータ： 抱井 尚子 (青山学院大学)

内容

混合研究法は、人間が関わる複雑な問題を総合的に理解するために、質的データ分析と量的データ分析を実施し、それらを統合したメタ推論を目指す研究手法である。その実施にあたっては、研究者個人が質的・量的データ分析に関する知識を修得しているか、あるいはそれらの知識を補完し合うチームを形成する必要がある。さらに、研究目的に適したデザインを選択し、その枠組みに基づいて研究を実施し、その結果を視覚的にわかりやすい形で提示する必要がある。このため混合研究法を用いる研究者は、その研究法の修得から、研究実践、そして成果発信に至るまで、従来型の研究法とは異なるさまざまなハードルを乗り越えなければならない。

本フォーラムでは、まず混合研究法の実施経験を持つ研究者から、最終的にまとめ上げられた論文からは知り得ない苦労話や裏話について話題提供をしていただく。その後ファシリテータと登壇者が、それぞれの研究の実施においてどのようなハードルに遭遇し、それをどのように乗り越えたのか（あるいはどう回避したか）といった点についての対話をを行う。そしてこの対話を通じて、登壇者および大会参加者の間で、混合研究法を修得・実施するまでのノウハウや有用な知見を共有することを目指す。

抱井 尚子
Hisako KAKAI, Ph.D



青山学院大学国際政治経済学部国際コミュニケーション学科・教授。
日英両語による数多くの方法論関連の書籍や論文を出版している。
著書に『混合研究法入門—質と量による統合のアート』や、マイク・
フェッターズ博士との共編著『混合研究法の手引ートレジャーント
で学ぶ研究デザインから論文執筆まで』がある。その他、ジョン・
クレスウェル著 *A Concise Introduction to Mixed Methods Research* の翻訳を手がけている。

Journal of Mixed Methods Research 編集委員（2007年～現在）。日本混合研究法学会（JSMMR）
初代理事長（2015年～2017年）。

話題提供 1

話題提供者： 木元 稔 (秋田大学)

“質か量か？” かのハードル

「研究では、現象を“量”で表現することをできるだけ追求する。量的な変数を比較するのが研究であり、比較できない最後に残ったものが“質”である。」これは、演者がたびたび耳にしてきた研究についての説明である。私自身、エビデンスは数値の大小で決定されると捉え、理学療法が量的な根拠に基づき実施されることを目指してきた。しかし、小児理学療法の対象となるお子様本人やご家族が抱える問題は多様かつ複雑であり、“質”的要素がむしろ多い。“質と量”的両方の観点から目の前の現象を捉えようとする混合研究の手法は言うまでもなく魅力的であるものの、“量”を重視してきた演者にとっての混合研究は、そのハードルが高いのも事実である。本講演では、混合研究の実施する際のハードルを、未経験者の視点から紹介したいと思う。

木元 稔
Minoru KIMOTO, Ph.D



秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻理学療法学講座・助教。専門は小児理学療法であり、研究は3次元動作解析装置を用いた歩行解析を中心に行っている。小児理学療法に関する執筆が多数あり、

「Crosslink 理学療法学テキスト 小児理学療法」では編集も担当した。量的研究のみでは解明することが難しい小児理学療法分野の複雑な問題に対し、質的研究や混合研究の手法が役立つのではないか

と考えはじめている。日本小児理学療法学会理事（2022年～）。

話題提供2

話題提供者： 前原 和明 (秋田大学)

特別支援教育における質的データを扱う難しさ、提案

これまで混合研究法を用いた研究を行った経験は僅かしかないが、様々な研究に取組む中では、常に混合研究法として成立するためにはどうすればよいかと、しばしば考えている。というのも、私の専門領域である特別支援教育や職業リハビリテーションでは、対象が障害のある人であり、量的な調査研究によって得られた結果が「どのように日々の支援で活用できるのか」や「どのような意味で有用なのか」という実践的有用性を明らかにすることが重要だからである。その一方で、当事者の声や現場の質的なデータを量的結果に統合することの難しさも日々感じているところである。話題提供では、これらに関して感じていることを率直に報告する。



前原 和明

Kazuaki MAEBARA, Ph.D

秋田大学教育文化学部こども発達・特別支援講座・准教授。専門は、特別支援教育及び職業リハビリテーション。これまで障害者の就労支援及び職業リハビリテーションに関する実践及び研究を独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構において行ってきた。2019年4月より現職。現在は、障害者の特別支援教育、社会参加、生涯学習、就労支援、職業的アセスメントなどに関心をもって研究に取組んでいる。

話題提供3

話題提供者： **山田 典子** (日本赤十字秋田看護大学)

博士後期課程での研究、その後の出版での苦労 これから博士研究に取り組む方への提案

約 15 年前、博士課程の論文ゼミで指導教授が放った一言が、今も私の心に突き刺さっています。それは、「これからはミックスメソッドやトライアンギュレーションの研究じゃないと学位が取れないよ」という呪いのようなフレーズでした。それからというものゼミでは博士の学生たちで自主的に学習会・研修会を企画し、その道の第一人者から教えを請いつつ、研究を進めていきました。博士課程の研究では、第三者に認められるまで、要するに学位が取れるまで、「本当にこれで大丈夫か?」「新規性はあるか?」「研究手法は妥当か?」等、常にこのまま進めていっても大丈夫なのかどうか、疑問符が付きまとっていました。今回は、自分の葛藤や失敗談を基に、話題提供したいと思います。



山田 典子
Noriko YAMADA, Ph.D

平成 27 年 4 月より日本赤十字秋田看護大学看護学部看護学科、日本赤十字秋田看護大学大学院看護学研究科。平成 31 年 4 月より日本赤十字秋田看護大学共同看護学専攻博士課程 教授 精神看護高度実践看護課程開講にて責任者。平成 19 年 4 月 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科博士（後期）課程入学。平成 22 年 3 月 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科博士（後期）課程単位修得。平成 24 年 3 月 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科より博士（看護学）授与。

2日目午後 ワークショップ

10月16日(日) 13:15-14:45

Room.1(Zoom)

司会:井上 真智子(浜松医科大学)

講師 : **P. Paul Chandanabhumma** (ミシガン大学)

Leveraging Mixed Methods Community-based Participatory Research (MMCBPR) to Advance Health Equity

Rationale: Community-based participatory research (CBPR) is a research approach in which researchers collaborate with community members and other stakeholders to address community health and health equity. Scholars in health and allied fields have increasingly embraced the use of mixed methods community-based participatory research (MMCBPR), a research approach that integrates CBPR with mixed methods research (MMR) designs. The purpose of this workshop is to help MMR scholars advance the use of MMCBPR to promote health equity.

Content to be Presented: First, the presenter will review the fundamental principles of MMR and CBPR. Next, we will describe the key characteristics and practices of MMCBPR. Selected examples are drawn from published MMCBPR articles in the U.S. Through these examples, we will highlight how MMCBPR are used to advance health equity research that responds to diverse contexts of the partnership communities. Participants will have the opportunity to apply the concepts learnt to their own projects by completing a workshop exercise to outline how they use the principles of MMCBPR to plan and implement their own project.

Planned Method of Evaluation: Participants may complete a workshop exercise to inform the application of MMCBPR concepts to their own work.

Prerequisite Knowledge: No prerequisite knowledge is required, though participants with knowledge of qualitative and quantitative methods and who have a community-based MMR project will be able to apply the content directly to their own work.

健康公平性の推進のための「混合研究法によるコミュニティベース参加型研究（MMCBPR）」の活用

目的: 「コミュニティベース参加型研究 (Community-based participatory research : CBPR)」は、研究者が地域の人々や他の利害関係者と協力し、コミュニティにおける健康や健康公平性の課題に取り組む研究アプローチである。健康分野、あるいは健康関連分野の研究者の中では、CBPR と混合研究法 (MMR) デザインを統合する研究アプローチとしての「混合法によるコミュニティベース参加型研究 (MMCBPR)」の利用が進められている。本ワークショップの目的は、健康の公平性の実現にむけて MMCBPR を利用する MMR 研究者を支援することである。

内容: まず発表者は、MMR と CBPR の基本原則を整理する。次に、MMCBPR

の主要な特徴と実践について説明する。米国で出版された MMCBPR の論文から厳選した事例を紹介し、これらを通じて、コミュニティの多様な状況に対応した形で健康の公平性に関する研究を推進するために、MMCBPR がどのように活用されているかを明らかにする。本ワークショップの参加者は、自分のプロジェクトの計画・実施に MMCBPR の原則をどう適用するかを、本ワークショップでの演習にて学んだ概念を自分のプロジェクトに適用する機会を得る。**計画された評価方法**：本ワークショップの参加者は、MMCBPR の概念を自分の研究に適用できるようになる。**前提知識**：質的・量的手法の知識があり、コミュニティベースの MMR プロジェクトに関わる参加者は、本ワークショップで学んだ内容を自分の研究に直接適用ができる。



**P. Paul Chandanabhumma, Ph.D, MPH
(Lead Presenter)**

Dr. Chandanabhumma is an Assistant Professor in the Department of Family Medicine and Executive Committee Member of the Michigan Mixed Methods Program. He completed his PhD in Community Health Sciences at UCLA Fielding School of Public Health. His mixed methods dissertation research examined the influence of group diversity on the achievements of community-based participatory research partnerships. His research interests include health inequities, race, culture, community engagement, and the social production of medical and public health practices.

Chandanabhumma 氏は、ミシガン大学医学部家庭医学科の助教であり、ミシガン混合研究法プログラムの運営委員会メンバーである。カリフォルニア大学ロサンゼルス校フィールディング公衆衛生学研究科 (Fielding School of Public Health) にて地域保健学の博士号を取得。博士論文の研究は、コミュニティベース参加型研究でのパートナーシップに対するグループの多様性の影響を調査したものである。研究テーマは、健康格差、人種、文化、コミュニティ参加、医療・公衆衛生実践の社会的生産など。

1日目午前

一般演題（口頭発表）

10月15日（土）11:40-12:40
Room.1 (Zoom)

セッション1／Session1

座長／Moderator：須田 智美 (Tomomi Suda) 八田 太一 (Taichi Hatta)

O1：上野 恵子 [経験的研究]

生活保護を利用する高齢者セグメントの生活課題の把握

O2：原田 智世 [経験的研究]

肺がん療養者に対する遠隔モニタリングを用いたテレナーシングの看護の特徴

10月15日（土）11:40-12:40
Room.2 (Zoom)

セッション2／Session2

座長／Moderator：前原 和明 (Kazuaki Maebara) 成田 慶一 (Keiichi Narita)

O3：Tatsuro Tahara [Methodological Research]

Identifying Factors Mediating Washback Effect of Quizzes in TOEIC Courses at a Japanese University: Toward an Exploratory Sequential Mixed-Method Study

O4：岡村 郁子 [経験的研究]

補習授業校の教師の成長に関する一考察
－在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（AG5）を通しての学びの検証－

2日目午前

一般演題（口頭発表）

10月16日（日）9:00-10:00

Room.1 (Zoom)

セッション3／Session3

座長／Moderator：赤川 祐子（Yuko Akagawa）八田 太一（Taichi Hatta）

O5：大塚 芳嵩 [方法論的研究]

人工知能の帰納的推論を組み込んだ新たな混合研究法の提案

O6：マイク・D・フェターズ [経験的研究]

米国医学留学経験に関する混合型評価研究－語学能力、医学知識、教育能力、個人的生活面、キャリアを対象に－

10月16日（日）9:00-10:00

Room.2 (Zoom)

セッション4／Session4

座長／Moderator：高階 淳子（Junko Takagai）成田 慶一（Keiichi Narita）

O7：Satoko Tabata [Methodological Research]

Mixed Methods Research (MMR) Using Workshop as a research methodology: a pilot study in Nepalese International School

O8：森本 真太郎 [方法論的研究]

説明的順次デザインの質的フェーズにおけるサンプリングの客観性を担保する工夫

2日目午前

一般演題（ポスター）

10月16日（日）9:00-9:40

Room.3 (Zoom)

セッション／Session

座長／Moderator：宗村 暁子（Nobuko Munemura）亀井 智子（Tomoko Kamei）

P1：山田 典子 [経験的研究]

就労している不妊治療経験者の年次休暇取得状況と両立困難感

P2：猪飼 やす子 [経験的研究]

特発性肺線維症療養者の尊厳に着目した看護師育成プログラムの開発と混合研究法による評価：研究プロトコール

2日目午前

科研特別報告

10月16日（日）9:00-10:00

Room.4 (Zoom)

セッション／Session

座長／Moderator：野崎 真奈美 (Manami Nozaki)

K1：河村 洋子

混合研究法に関する説明力と適応力の認識と学修ニーズ

K2：稲葉 光行

看護研究における混合研究法の学習と実践のハードル—GTxAによるデルファイ調査の逐語録分析から—

K3：抱井 尚子

質的研究主導型マルチメソッド・混合研究法（MMMR）を用いた教材開発研究

K4：抱井 尚子

看護研究者のための MMR 教育モデルの構築—混合型デルファイ調査法を用いて—

演題：生活保護を利用する高齢者セグメントの生活課題の把握

著者：上野 恵子¹⁾、西岡 大輔^{1・2)}、齋藤 順子³⁾、木野 志保^{1・4)}、近藤 尚己¹⁾

所属：1)京都大学大学院 医学研究科 社会疫学分野 2)大阪医科大学 研究支援センター 医療統計室 3)国立がん研究センター がん対策研究所 行動科学研究所 4)東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 健康推進歯学分野

本発表の専門分野：公衆衛生、社会医学

【背景】生活保護利用者は経済的支援を受けている一方、複雑な健康・生活支援のニーズを抱えている。特に生活保護を利用する高齢者の生活課題は複雑であり、健康・生活支援のニーズは多様である。セグメンテーションは、ある人々の集団を共通の特徴をもつ小集団（セグメント）に細分化することをいい、セグメントの特徴に応じた適切な支援策を提供するための重要なアプローチである。本研究では、生活保護を利用する高齢者の属性情報を用いて定量的にセグメントを作成し、各セグメントが抱える生活課題をケースワーカーへのインタビュー調査により検討するために、混合研究法を実施した。

【方法】混合研究法の説明的順次デザインを用いた。量的段階では、2自治体の福祉事務所の65歳以上の生活保護利用者（n=3,165）を対象とし、基本管理データと介護扶助データを用いてソフトクラスタリングにより男女別のセグメントを作成した。質的段階では、2自治体の福祉事務所に勤務するケースワーカー4名を対象とし、半構造化形式の共同インタビューを実施した。インタビュー参加者に量的段階で作成したセグメントの特徴を提示し、各セグメントの特徴をもつ生活保護を利用する高齢者がどのような生活課題を抱えているかについて尋ねた。インタビューデータは質的帰納的に分析した。本研究は、東京大学大学院医学系研究科・医学部倫理委員会の承認を得て実施された（審査番号：2018101NI）。

【結果・考察・結論】量的分析の結果、男女別に5つのセグメントが作成され、4つのセグメントの特徴は男女間で類似していた（類似するセグメントの名称：“就労者”、“在宅で支援を受けて生活する人”、“ライフイベントのため生活保護の利用を開始した人”、“障害をもつ施設入居者”）。質的分析の結果、セグメントの生活課題として、住居問題（「救護施設に入居できない」、「賃貸住宅での生活に馴染めない」）、金銭問題（「年金受給者は入院時に自己負担額が発生し、生活水準が低下する」、「家賃の支払いがうまくできない」、「就労収入を申告しない」、「日々の金銭管理ができない」）、健康管理の問題（「定期的に医療機関を受診しない」）、サービス利用拒否（「福祉障害サービスの利用を拒否する」）が挙げられた。なお、「ケースワーカーが生活課題を把握していない」セグメントや、「生活課題がない」セグメントがあった。以上の結果から、各セグメントの生活保護を利用する高齢者が抱える生活課題は異なり、セグメントに応じたアセスメントおよび多様な援助方針の策定が必要とされていることが分かった。

【混合研究法への示唆】本研究は、機械学習の手法であるソフトクラスタリングを用いて定量的に作成されたセグメントの特徴を定性的に解釈し、セグメントごとの課題や支援ニーズを検討するという、公衆衛生学分野の新たな混合研究法の活用例である。

演題：肺がん療養者に対する遠隔モニタリングを用いたテレナーシングの看護の特徴

著者：原田 智世^{1・2)}、亀井 智子¹⁾

所属：1)聖路加国際大学大学院看護学研究科 2)同大学大学院看護学研究科博士後期課程

本発表の専門分野：遠隔看護、混合研究法

【背景】遠隔モニタリングを用いたテレナーシング(Telenursing: TN)は、在宅療養者のバイタルサインズや症状等の心身情報を収集し、遠隔地の看護職がモニタリングしてアセスメントし、病状変化や安定性を判断し、看護相談や指導を行うものである。本研究では、TNの看護記録に着目し、看護記録の内容(Qualitative: QUAL)と、量的(Quantitative: QUAN)な用語の頻度を統合し、TNにおける看護の特徴を検討することを目的とした。

【方法】研究協力に同意を得た肺がん、70歳代男性1名に対し、遠隔モニタリングを用いたTNを17ヶ月間提供した。TNで対応した内容は、問題解決志向SOAP(Subjective data, Objective data, Assessment, and Plan)で毎日記録した。TNにおける遠隔モニタリングデータが閾値に該当した際は、遠隔看護相談・指導、メンタリングを実施した上で同様に記録した。看護記録の内容(QUAL)を収集し、テキストマイニングソフトウェアを用いて10回以上出現する頻出語を計量化(QUAN)した。S/O/A/P毎における頻出語同士の関係を探るため、質的な分析は共起ネットワーク分析を行い、共起性が認められたグループの特徴を表すサブカテゴリ・カテゴリ名を命名した。ジョイント・ディスプレイを作成し、看護記録の内容(QUAL)と頻出語(QUAN)を統合し、TNにおける看護の特徴に関するメタ推論を導出した。本研究は、所属大学の研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号:20A13, 20A043)。

【結果・考察・結論】514日間の看護記録が収集され、10回以上抽出された頻出語は22語であった。頻出語は、計測値・問診回答、遠隔看護対応手段に関する用語が最も多く、次いでトリガー該当への対応に関する用語であった。S/O/A/P別の共起性は、療養者の[自覚と認識状況]を捉え、[心身情報と看護対応]に基づき[現状把握と判断]を行い、[継続的な調整と支援策]を定めるカテゴリが抽出された。QUANとQUALを統合し、TNにおける看護の特徴は、“遠隔モニタリングの心身情報と遠隔コミュニケーションを介した情報に基づき、モニタリング、看護介入、アセスメント、計画を繰り返しながら支援している”メタ推論が導出された。TNの実践では、療養者の心身の現象を日々扱うため、今回の結果は、TN実践の理解に寄与すると考えられる。

以上から、TNにおける看護は、在宅療養者から取得した心身情報を基に、日々看護過程を開拓しながら遠隔地からの看護提供が実現していることが示唆された。

【混合研究法への示唆】本研究は、TNにおける看護という現象を看護記録の内容からアプローチし、QUANとQUALの両データを生み出し、両者を統合することで、看護の特徴を理解した。このような手法を提示することは、看護の現象の理解を促進するための1つのアプローチとして、混合研究法の可能性や発展性、看護研究への応用への議論にインパクトを与えると考えられる。また、本結果は、在宅看護および遠隔看護領域やその他の分野において、混合研究法に関する知識と理解の前進に貢献すると考える。

Title: Identifying Factors Mediating Washback Effect of Quizzes in TOEIC Courses at a Japanese University: Toward an Exploratory Sequential Mixed-Method Study

Author(s): Tatsuro Tahara

Affiliation(s): Waseda University

Discipline/Profession of the paper: English Education, Applied Linguistics

[Background] The washback effect, i.e., the effect of tests on teaching and learning (Alderson & Wall, 1993), has been a critical issue in language assessment. However, little is known about the effect of small-scale classroom assessment. To engineer a beneficial washback of classroom assessment, it is imperative to identify the mediating factors relative to particular situations. This study aims to identify the factors mediating the washback effects of classroom assessment, focusing on vocabulary and grammar quizzes in TOEIC courses at a Japanese university.

[Description of mixed methods theoretical and/or methodological concepts and issues] This study was conducted in phase 1 (qualitative phase) of an exploratory sequential design (Creswell, 2014), whereby qualitative data is expected to be collected and analyzed to provide a foundation for phase 2 (quantitative phase). The unique aspect of this study is that participants were asked to describe the mediating factors of vocabulary and grammar quizzes they experienced related to the test preparation, and their learning behaviors. Eight participants were also asked to rate how strongly each factor affected their learning on a scale of 1 to 3. All eight participants provided informed consent. This approach to detecting mediating factors was taken from Mikami's (2015) method for identifying confounding factors.

[Implications] This study will provide an approach to conducting phase 1 of an exploratory sequential design. This approach can contribute to the data collection method for phase 1, making it easier to form a statistical model in phase 2, such as determining the mediating factors as well as the weighting of each factor.

[References]

- Alderson, J. C., & Wall, D. (1993). Does washback exist?. *Applied Linguistics*, 14(2), 115-129.
- Creswell, J. W. (2014). *A concise introduction to mixed methods research*. Sage.
- Mikami, H. (2015). A proposal for more desirable qualitative research: Consider thick description from the confounding aspect. *Reports on Studies in Japan Association for Language Education and Technology, Kansai Chapter; Methodology Special Interest Group (SIG)*, 6, 16-30.

演題：補習授業校の教師の成長に関する一考察

－在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（AG5）を通しての学びの検証－

著者：岡村 郁子

所属：東京都立大学

本発表の専門分野：異文化間教育、海外子女教育、教師教育

【背景】海外の補習授業校は、もともと海外で学ぶ日本人の子女が帰国した際に困らないための日本語および教科学習の補習を行うことを目的に設置された。近年では、永住者や外国籍・国際結婚家庭が増加し、子どもの多様性を包摂する教育が求められている。海外子女教育振興財団は、2017年度より5年間、文科省の「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」（以下、AG5）の委託を受け、筆者らはその一環として「補習授業校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」に関わってきた。本研究では、AG5の成果を質問紙調査により検証するとともに、量的調査では明らかにできない個々の教員の学びを、その語りを通して詳しく分析するため、インタビュー調査を実施した。

【方法】 AG5の活動を通じた教師の学びについて把握するために、2021年8月にGoogleフォームを用いたインターネット経由の無記名質問紙調査を実施した。設問は、回答者の属性を問うものが9問、AG5の活動への参加に関するものが13問、自分自身の研修を通じての成長を問うものが1問、自由記述を含めて合計24問で、本発表ではそのうち教師の学びに関する結果を取り上げる。インタビュー調査においては、質問紙調査で明らかになつた教師の学びをさらに明らかにするため、教師自身の成長に関わる語りについて分析した。なお本調査は2021年7月東京都立大学研究倫理委員会による審査・承認を得ている(H3-103)。

【結果・考察・結論】 質問紙調査の結果について因子分析を行い、「児童生徒との関係性の向上」「授業指導力の向上」「職場内での協力体制の強化」「家庭との連携」の4因子を抽出した。インタビュー調査の分析では、「研修機会の貴重さ」「最新の授業方法についての学び」「研究授業への参加によるスキルの向上」「補習授業校の存在意義の理解」等の肯定的な言説、「研修参加の難しさ」「家庭への働きかけの限界」等の否定的な言説も見いだされた。

【混合研究法への示唆】 質問紙調査では約85%の参加者がAG5について「役に立った」と回答したが、インタビュー調査により、さらに具体的な教師の成長が明らかになった。質問紙調査により抽出された4因子はいずれも肯定的なものであるが、インタビュー調査では研修参加の困難さや限界などの言説を確認することができた点で有効であると考える。

【参考文献】

文部科学省在外教育施設の今後の在り方に関する検討会（2021）.在外教育施設未来戦略

2030——海外の子供の教育のあるべき姿の実現に向けて——

https://www.mext.go.jp/content/20210607-mxt_kyokoku-000015472-2.pdf (2022年7月10日)

*本研究は海外子女教育振興財団によるAG5プロジェクトの成果に基づくものです。

調査にご協力いただいた皆様ならびに本プロジェクト関係者各位に深謝申し上げます。

演題：人工知能の帰納的推論を組み込んだ新たな混合研究法の提案

著者：大塚 芳嵩^{1,2)}、今西 純一¹⁾、那須 守³⁾、岩崎 寛²⁾

所属：1)大阪公立大学 2)千葉大学 3)室蘭工業大学

本発表の専門分野：ランドスケープ（造園）学、園芸学、都市計画学、社会疫学

【背景】近年のAIの発展における背景として、計算機とソフトウェアの機能向上によるベイズ統計学の一般化があげられる。ベイズ統計学は、ネイマンとピアソンが確立した *p* 値を用いた伝統統計学（頻度主義）の演繹法による仮説検定とは異なり、帰納法による仮説生成を行う。また、近年のデータベースの拡充に伴い、データセットに含まれるサンプルサイズ、変数ともにビックデータ化が進んでいる。AIの存在は、混合研究法における量的・質的研究を組み合わせたパラダイム（認識論）と方法論に対して如何なる可能性をもたらすのか。本研究では、AIの帰納的推論を組み込んだ新たな混合研究法について提案する。

【混合研究法に関する概念・理論の提示】混合研究法の理念は、認識論と方法論が異なる量的・質的研究を組み合わせることで、より有益な成果を上げる実用主義的な発想に原点があると考えられる。この理念を踏まえると、従来の混合研究法における量的・質的研究の組み合わせに対して、ベイジアンの認識論と方法論を加えることさらなる発展を得られると考えられる。ベイズ統計学（具体的にはベイジアンネットワーク）は、量的研究（ここでは伝統統計学を指す）と同じく、（ポスト）実証主義的な認識論を原則とする。しかし、ベイジアンネットワークは、分析過程においてデータセットにおけるすべてのサンプルと変数を組み合わせ、最も尤もらしいネットワーク状の構造モデル（仮説）を構築する。この分析上の特性は、帰納法による質的研究と類似性がある。また、ベイジアンネットワークは、確率推論機能によるシミュレーション（実証試験前の事前評価）が容易に実施できる。“仮説はAIがつくる”この概念は、ベイジアンが掲げる伝統統計学へのアンチテーゼであり、従来の仮説検定から人間の主観を極力排除して客觀性を高める重要性を訴えている。

【混合研究法への示唆】そこで、著者らは、混合研究法における探索順次デザイン（多段階評価デザイン）を発展させた①質的研究（解釈主義的なGTA）による研究計画構想とデータセットづくり、②ベイズ統計学（ベイジアンネットワーク）による仮説生成及びシミュレーション、③伝統統計学による仮説検定（実証試験）、④質的研究によるフォローアップと結論の導出、⑤研究計画及びデータセットの修正、といったスパイラルアップ型の新たな混合研究法を提案する。この方法により、人間とAIの双方が仮説と結果を考察するデータインタラクティブな研究を実現することができる。現在、著者らは大阪市を対象とした環境・社会・健康に関する疫学研究において、この方法論を採用してパネルデータの作成とAIによる構造モデルの構築に取り組んでいる。また、この方法論は、批判的実在論に基づくアクションリサーチのフレームワークとも近似する。将来的には、この方法論を発展させることで、健康格差の緩和や社会的弱者のレジリエンスに繋がる知見を生み出すことを目指す。

演題：米国医学留学経験に関する混合型評価研究－語学能力、医学知識、教育能力、個人的生活面、キャリアを対象に－

著者：マイク・D・フェターズ¹⁾、榎原麗²⁾ アリソン・ファーガル¹⁾ 田島千裕³⁾

所属：1) ミシガン大学 2) テンプル大学 3) 学習院女子大学

本発表の専門分野：医学教育、医学留学、グローバルヘルス、異文化コミュニケーション

【背景】 医学留学は有益であると広く受け入れられている一方で、エビデンスの多くは逸話的であり個人的報告に基づくものである。特に米国留学した日本人医療関係者の留学成果については研究の蓄積がない。日本の非営利団体である野口医学研究所は、35年間に渡り医学留学を支援してきたが、参加者の経験に関する量・質データは分析されていない。本研究の目的は、米国への医学留学がおよぼした影響を包括的に明らかにすることであり、質・量の両データの収集が不可欠であった。

【方法】 野口医学研究所が支援した日本人留学生に質問紙を配布し、英語能力、医学知識、教育能力、個人的生活面、およびキャリアの五つの領域について0-9ポイントのリッカート尺度を用いて留学経験の影響を自己評価してもらった。量的回答に対する説明文として質的データも収集し、ジョイントディスプレイ分析法を用いて量・質結果を統合した。

【結果・考察・結論】 米国医学留学経験がある医師で、調査項目の25%以上に回答した95名（医師・医療研修生の回答率95/600=16%）を分析対象とした。量的自己評価に基づき参加者への留学の影響を「最大」、「中等度」、「最小」の三カテゴリーに区別した。結果、留学が影響を及ぼした程度は、医学知識（n=51・大、20・中、13・小）と教育能力（n=51・大、22・中、11・小）が最大で、次いでキャリア（n=50・大、16・中、18・小）、英語能力（n=38・大25・中、21・小）、個人的生活面（n=34・大、30・中、20・小）であった。質的結果からは、最小、中等度、最大の影響スペクトルに沿い、異文化感受性発達モデルの理論に見られる、受容、適応、統合の発達が反映されたことが明らかになった。調査結果は、留学経験が上記五つの領域に渡り影響を与えたエビデンスを示した。加えて医学留学への支援も評価された形である。

【混合研究法への示唆】

混合研究法への示唆としては、まずグループ間の推論および領域間のメタ推論を一つのジョイントディスプレイで報告した点である。次に、量・質結果を、異文化感受性発達モデルの理論の枠組みを用いた点も挙げられる。最後にチームによる協働の重要性も示した。

【参考文献】

- Bennett, M. J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R. M Paige (ed.), Education for the intercultural experience (pp. 21 · 71). Yarmouth, ME: Intercultural Press
- Curry, L. A., O'Cathain, A., Clark, V. L. P., Aroni, R., Fetter, M., & Berg, D. (2012). The Role of Group Dynamics in Mixed Methods Health Sciences Research Teams. Journal of Mixed Methods Research, 6(1), 5–20. <https://doi.org/10.1177/1558689811416941>

Title: Mixed Methods Research(MMR) Using Workshop as a research methodology: a pilot study in Nepalese International School

Author(s): Satoko Tabata¹⁾, Sabin Khanal²⁾, Kalu Singh Mehta³⁾

Affiliation(s): 1) The University of Tsukuba Doctoral Student 2) Kathmandu University Master of Ed Student 3) Daito Bunka University Doctoral Student

Discipline/Profession of the paper: International comparative education focusing on teacher education

[Background] Although early MMR was strongly influenced by quantitative research methods, interpretive MMR was proposed with an emphasis on qualitative research approaches by Howe(2004) after Scienced Based Research (SBR) backlash. In recent years, qualitative research-driven MMR, which has multifaceted clarification using multiple methods, has attracted more interest.

[Description of mixed methods theoretical and methodological concepts and issues] Post-qualitative research seeking to liberate itself from SBR has been in the limelight in qualitative research(Lather, 2013). Still, the response to post-qualitative research in mixed research methods is just beginning. One participatory research method for post-qualitative analysis is the workshop(Ørngreen, R., & LevinsenKarin, 2017). While there have been many studies on the effectiveness of workshops in MMR, there are no studies that have collected qualitative data using workshops as a research method so far. In this study, the quantitative data is collected by conducting before and after the workshop. Observation and description in the workshop are used to obtain qualitative data from observations and descriptions in worksheets to examine what rich data can be collected.

[Implications]

The significance of this study is to demonstrate how the workshop methodology is effective in ensuring democracy and capturing the whole experience in the local context as qualitative research-driven MMRs.

[References]

- Howe, K. R. (2016). A Critique of Experimentalism. *Qualitative Inquiry*, 10(1), 42–61.
<https://doi.org/10.1177/1077800403259491>
- Ørngreen, R., & LevinsenKarin. (2017). Workshops as a Research Methodology. *Electronic Journal of E-Learning*, 15(1), 70–81. <https://eric.ed.gov/?id=EJ1140102>
- Lather, P., & Pierre, E. A. S. (2013). Post-qualitative research. *International Journal of Qualitative Studies in Education*, 26(6), 629–633. <https://doi.org/10.1080/09518398.2013.7887>

演題：説明的順次デザインの質的フェーズにおけるサンプリングの客観性を担保する工夫

著者：森本 真太郎

所属：日本福祉大学

本発表の専門分野：リハビリテーション科学、作業療法

【背景】質的研究の厳密なサンプリングでは、作業工程を詳細に開示し、どのような対象者がどのように選出されたかを論じる必要がある。本発表では、筆者が実施した説明的順次デザインの参加者選定モデルを用いた研究（2021年）から、質的フェーズのサンプリング方法を取り上げ、混合研究法で活用する際の利点と射程について示唆を述べたい。

【混合研究法に関する概念・理論の提示】説明的順次デザインにおいて、量的段階の結果を踏まえて質的段階の対象者を選定するためのモデルを参加者選定モデルという。このモデルでは、両段階を方法レベルで連結することでデータの全体的特性とその詳細をつなげて理解でき、さらに量的段階の結果を根拠とした質的段階の対象者選定が可能になる。筆者は、このモデルを用いて以下の研究を行った。研究目的は、某デイサービス施設とその利用者を対象に、デイサービスに対する心情（以下、心情）の特性を明らかにし（量的段階）、その結果を受けて、心情の詳細をデイサービスでの経験を踏まえて網羅的に理解すること（質的段階）であった。量的段階では、対象者47名に対し、心情に関する12の質問項目についてVisual Analogue Scale（以下、VAS）を用いてデータ収集を行った。質的段階では、量的段階の対象者から8名を選び個別インタビューを行った。この8名を選出するために、量的段階の分析にてVAS値の主成分分析を行った。そして導出された第1、2主成分の主成分得点を用いてクラスター分析を行い、対象者を4つのクラスターに分類した。この結果を踏まえ、質的段階の対象者を各クラスターの中で第1、2主成分の主成分得点が所属クラスターの平均値に近い者から順に選定した。第1クラスターから順に1名ずつ個別インタビューを行い、各グループから2名ずつ、合計8名に達した時点で理論的飽和に達したため新たな対象者選定をやめた。

【混合研究法への示唆】先に提示したサンプリング方法は、対象者集団の全体的特性から、統計学的分析結果を根拠として提示しながら、質的段階の対象者を選定したものである。この方法の利点は、質的段階の対象者選定の工程と根拠が開示できること、および再現性があり追試可能な点が挙げられる。また、質的段階において各クラスターの典型的な特性を有する者を選定できる可能性が高くなり、理論的飽和までデータを収集することで、対象者集団の心情を詳細かつ網羅的に捉えることができたと考えられた。この方法を応用すれば、クラスター数を操作したり、平均値から外れた特異的な事例を選定することで、その研究に合った目的相関的なサンプリング工程を根拠と共に提示することが可能になると考えられた。

【参考文献】

森本真太郎.(2022).居場所感が醸成される高齢者通所介護の支援に関する検討.日本福祉大学健康科学論集,25,1–11.

演題：就労している不妊治療経験者の年次休暇取得状況と両立困難感

著者：山田 典子¹⁾、佐藤 高輝²⁾、山崎 貞一郎³⁾、前田 恵理³⁾

所属：1) 日本赤十字秋田看護大学、2) NPO 法人フォレシア

3) 秋田大学大学院医学系研究科衛生学・公衆衛生学講座

本発表の専門分野：精神保健看護学

【背景】佐藤（2021）らの先行研究より、働きながら不妊治療を受ける労働者は増加傾向にあるが、不妊治療経験者は治療のために仕事を休みづらいと感じていた。本研究では、不妊治療経験者の割合と年次休暇取得状況および自由記述に認められた「休みづらさ」の本音とともに、改善策を検討する。

【方法】不妊治療と仕事の両立において一夫婦ごとに異なる体験があり、どのくらいの割合の公務員が不妊治療をし、このプロセスにおいて何を経験したかを明らかにするために混合研究法を選択した。A 県内の公務員 3,378 人（男性 2,701 人、女性 677 人）を対象に、2021 年 2 月 8 日から 15 日までイントラネット上で無記名式質問紙調査を実施し、不妊治療経験者に対して、両立困難感、不妊治療職場開示の有無、勤務形態の変更を考えた経験等について尋ねた他、自由記述を分析対象とした。倫理的配慮として、調査者よりデータの二次分析の承諾を受け、A 大学研究倫理審査の承認を得て二次利用した。個人や組織の特定に繋がらないよう配慮した。

【結果・考察・結論】回答者 1,354 人（回収率 40%）のうち、不妊治療経験者は 172 名（13%）であった。治療経験者は 172 名、うち 85 名（49%）が仕事と治療の両立困難を感じ、困難感のあった 38%が勤務形態の変更（退職・転職等）を考えていた。127 名（74%）は不妊治療について職場に伝えていなかった。女性 30 名、男性 8 名の自由記述より、【当事者になって初めて知った大変さと孤独】【時間とお金、体力を消費する不妊治療】【心身共に非常に負担が大きい不妊治療への理解が乏しい上司】【専門医が少なく激混みの病院で十分な IC は望めない】【仕事と治療の両立ができなければ諦めるという選択肢しかない】のカテゴリが抽出された。

【混合研究法への示唆】不妊治療経験者の年次休暇取得状況と両立困難感を糸口とし、不妊治療がはらむ闇について、混合研究法の収斂デザインを用いることで現象を捉えることができた。「適齢期になったら結婚、結婚をしたら赤ちゃんの出産、子どもが生まれたら進路について悪気もなく聞いてしまう日本の文化」の中で、どんなに努力をしても報われないかもしれない「高額で出口の見えない不妊治療」に挑む者の困難感に焦点があたり、労働者の精神的健康をサポートしていくための実用的で有意義性のある示唆が得られた。

【参考文献】

- 抱井尚子. (2016). 混合研究法への誘い—質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ. 遠見書房, 東京.
- 佐藤高輝, 山崎貞一郎, 前田恵理, 山田典子. (2021). 不妊治療経験の有無による労働環境に対する認識の差異. 日本公衆衛生学会総会. Web 抄録集, 205.

演題：特発性肺線維症療養者の尊厳に着目した看護師育成プログラムの開発と混合研究法による評価：研究プロトコール

著者：猪飼 やす子

所属：聖路加国際大学大学院看護学研究科

本発表の専門分野：看護学

【背景】難治性で症状緩和の難しい特発性肺線維症 (idiopathic pulmonary fibrosis; IPF) 療養者の尊厳に着目した看護を基盤とする看護師育成プログラムを開発し、看護実践項目の変化がなぜ生じたのかを混合研究法により検討する。

【方法】 1. 研究デザイン：量的研究（層化ランダム化比較試験）を参加者選定モデルによる質的研究（インタビューガイドに基づく半構造化面談）にて説明する説明的順次デザイン（Creswell & Plano-Clark, 2007）
 2. 研究対象者：日本看護協会ホームページに登録を公開している慢性呼吸器疾患看護／呼吸器疾患看護認定看護師、慢性疾患看護専門看護師（サブスペシャリティ：呼吸器疾患）の有資格者 46 人
 3. 実施方法：呼吸器センターの設置の有無という要因を層化し、介入群と対照群に均等に割り付ける層化ランダム化比較試験とし、中央割り付けを行う。質問紙調査は看護実践項目 34 間と自己効力感尺度で構成し、質問紙調査の 1 回目は、研究開始前に両群が回答する。介入群は 1 回目の質問紙調査以降 1 か月の間に、看護援助に関するオンデマンド教材を視聴する。教材は、第 1 章疾患概論、第 2 章療養者の特性の理解、第 3 章看護援助の合計 19 コンテンツで構成される。
 4. 調査項目：主要評価項目は、独自作成した看護実践項目質問票（2 件法）、副次的評価項目は、GSES 一般性セルフ・エフィカシー(自己効力感)尺度（坂野ら, 1986）（2 件法）と看護実践項目が増加した者へのインタビューとする。

【結果・考察・結論】 本研究は所属の研究倫理審査委員会（A22-029）の承認を受けた。

【混合研究法への示唆】 IPF 療養者への看護師育成プログラムが看護実践項目の増加にどのように役立つかは、量的データのみでは説明することが難しい。混合研究法の説明的順次デザインにより、教材視聴後看護実践項目が増加した者のうち、所属が呼吸器専門病院の者、呼吸器専門病院ではない者、訪問看護ステーションで在宅支援をする者を各 1 名ずつ、合計 3 名にインタビューガイドに基づくインタビューを行う参加者選定モデルとし、看護実践項目が増加した要因を自己効力感の変化と合わせて分析、評価する。

【参考文献】

- Fetters, M. D. (2019). *The Mixed Methods Research Workbook: Activities for Designing, Implementing, and Publishing Projects.* 73-75, SAGE Publications, Inc
 坂野雄二 & 東條光彦 (1986). 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み. 行動療法研究, 12(1), 73-82. doi:10.24468/jjbt.12.1_73

演題：混合研究法に関する説明力と適応力の認識と学修ニーズ

著者：河村 洋子¹⁾、抱井 尚子²⁾

所属：1)産業医科大学 2)青山学院大学

本発表の専門分野：研究方法学修、看護教育

【背景】現在日本混合研究法学会の理事を中心とした研究プロジェクトチーム（以下、研究班）では、看護分野における混合研究法の学修ニーズに応えるための混合研究法 e-ラーニングの開発を目指し取り組んでいる。その一環として昨年は八田ら（2021）が混合研究法の学習や実践の経験の違いによって学び進めることの障壁の認識や学習ニーズが異なることを明らかにした。本研究は、混合研究法の実践に関する説明力や適応力の自己評価（認識）の観点から検証し、学習ニーズに関して多角的な知見を得ることを目的とした。また、研究班は看護分野の研究者の混合研究法に関する多様な現状とニーズを捉える基礎的な調査として、オンラインアンケート調査とフォーカス・グループ・インタビューを実施しており、本研究においても量的・質的双方のデータを分析し結果を統合することで、学習ニーズについて多面的に検証することを試みた。

【方法】看護分野の研究者を対象に実施したオンラインアンケートのデータ（八田ら, 2021）から混合研究法に関する力を測ることを目的として開発された Guttermann 尺度(Guterman, 2017) のうち、混合研究法に関して説明する力と適用する力を、リサーチクエスチョン・哲学（3 項目）、デザイン／アプローチ（10 項目）、サンプリング（2 項目）、データ収集（2 項目）、結果の公表（2 項目）の観点から自己評価する質問項目を用いて、説明力と適用力の合計点を算出した。この合計点について、相互に独立するように、高、中、低の 3 群に分けた。この 3 群間について、研究アプローチの傾向、混合研究法のスキルに対する満足感、Guterman 尺度の中の混合研究法に関する学習や経験の違いを検証した。また、アンケート回答者の中に含まれる FGI 参加者 23 名の逐語録を用いて学習ニーズについて分析し 3 群間による違いを検証し、量的データの結果と統合する予定である。

【結果・考察・結論】量的データの分析には該当する 19 項目に回答した 114 名のデータを用いた。説明力と適応力の自己評価は強く関連していることが確認できた（相関係数=0.952, $p<.001$ ）。説明力の平均値は 25 点満点中、高群では 18.9 ($SD = 2.27$, $n = 34$)、中群では 11.8 ($SD = 1.6$, $n = 30$)、低群は 6.7 ($SD = 1.0$, $n = 50$) であった。適用力は高群 15.6 ($SD = 2.1$, $n = 34$)、中群 9.7 ($SD = 1.2$, $n = 27$)、低群 5.7 ($SD = 0.9$, $n = 53$) であった。また、説明力と適用力双方の 3 群間で、混合研究法のトレーニングを受けた経験有無の分布に有意な差が確認できた ($p<0.05$)。今後さらに量的データの分析を進め、質的データの分析を行い、統合し混合型研究による知見の創出を目指す。

【混合研究法への示唆】本研究は看護研究者のための混合研究法 e-ラーニング開発を目的とする多段階混合研究法プロジェクトの一部にあたる。本研究は混合研究法の学修をテーマとして、それ自体が収斂デザインによる混合型研究として学修材料になり得るため、本邦の混合研究法の広がりに貢献することができると言える。

【参考文献】

- Guetterman, T. C., et al. (2017). Development of a Self-Rated Mixed Methods Skills Assessment: The National Institutes of Health Mixed Methods Research Training Program for the Health Sciences. *J Contin Educ Health Prof*, 37(2), 76-82.
- 八田太一・阿部路子・田島千裕・抱井尚子. (2021). 混合研究法における「統合」の実現形態—MMR 教育ニーズの含意 第 7 回混合研究法学会年次大会プログラム・抄録集, 64.

演題：看護研究における混合研究法の学習と実践のハードルーGTxAによるデルファイ調査の逐語録分析からー

著者：稻葉 光行¹⁾、高木 亜希子²⁾、抱井 尚子²⁾

所属：1)立命館大学 2)青山学院大学

本発表の専門分野：混合研究法、看護研究、テキストマイニング、GTxA

【背景】質的・量的研究のハイブリッドである混合研究法の学習や研究実践では、それぞれの研究法を単独で学習・実践するよりも様々な課題が起こると推測される。筆者らはこれまで、看護学研究者を対象とし、混合研究法に関わるハードルの調査に取り組んできた。そしてその一環として、海外のエキスパートに対してデルファイ調査を実施した。本発表では、その逐語録を分析した結果を報告する。

【方法】本研究では、混合研究法のエキスパートである海外の研究者5名に対するデルファイ調査を実施した。そしてそこで得られた語りを、混合型分析(mixed analysis)の1つとして筆者らが提案する Grounded Text Mining Approach (GTxA)(Inaba & Kakai, 2019)を用いて分析した。GTxAは、構成主義版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(C-CTA)によるデータ分析とテキストマイニングを反復的に適用し、得られた知見を統合したメタ推論を得ることを目指す混合研究法である。

本研究では、C-GTAを用いて、まず分析者が単語毎・文章毎・焦点化コーディングを行った。その後テキストマイニングによる分析を行い、C-GTA段階も含めた反復的な検証を行った。さらに両方の結果に対するメタ推論を導出した。

【結果・考察・結論】分析の結果、混合研究法の学習・実践に関わってエキスパートが重視する視点として、”paradigm”などに象徴される「概念理解」、”literature”に象徴される「文献による学び」、”publish”や”joint display”に象徴される「研究成果発信」、そして”training”に象徴される「実践的トレーニング」といった概念が見出された。また「概念理解」および「研究成果発信」をほとんどのエキスパートが重視する一方、「文献による学び」と「実践的トレーニング」は重視の程度に差があることが示された。

【混合研究法への示唆】混合研究法に対する示唆は2点である。1点は、GTxAを用いることで、エキスパートが重視する概念を質的・量的データを並置する形で視覚的に提示できることである。もう一点は、テキストマイニングによって質的データ分析の過程が効率化されたことである。近年自然言語処理技術によって質的データ分析を効率化する試みが行われているが(Poth et al., 2021)、本研究も同様の効率化に貢献できる可能性がある。

【参考文献】

- Inaba, M., & Kakai, H. (2019). Grounded Text Mining Approach: A Synergy between Grounded Theory and Text Mining. In A. Bryant & K. Charmaz (Eds.), *The SAGE Handbook of Current Developments in Grounded Theory* (pp. 332–351). SAGE Publications Ltd.
- Poth, C. N., Bulut, O., Aquilina, A. M., & Otto, S. J. G. (2021). Using Data Mining for Rapid Complex Case Study Descriptions: Example of Public Health Briefings During the Onset of the COVID-19 Pandemic. *Journal of Mixed Methods Research*, 15(3), 348–373. <https://doi.org/10.1177/15586898211013925>

K3

演題：質的研究主導型マルチメソッド・混合研究法（MMMR）を用いた教材開発研究

著者：抱井 尚子

所属：青山学院大学

本発表の専門分野：研究法、看護学研究

【背景】本研究は、日本の看護研究者に対する混合研究法教育のガイドラインと e-ラーニングシステムの開発を目的とし、2020 年度より始まった多段階調査である。今回の調査では、日本の看護学研究者が混合研究法に関わって遭遇するハードルを特定し、それらの克服を支援する教育のあり方を、海外のエキスパートに対するデルファイ調査によって明らかにすることを目指した。当初本調査では、専門家への匿名の量的アンケート調査を実施し、合意に近づくまで調査をくり返す伝統的なデルファイ調査を、自由記述欄を設けた上で実施する計画していた。しかし問題の複雑さから、濃密なデータ収集が必要と判断し、デルファイ調査の第 1 ラウンドを、海外のエキスパート 5 名に対する個別インタビューに変更した。そしてこのインタビュー調査の結果を元に質問項目を作成した。第 2 ラウンドのデルファイ調査では、世界の様々な地域で混合研究法の教育・研究に携わる看護学研究者を対象に、オンラインサーベイを実施した。

【混合研究法に関する概念・理論の提示】

一般に、複数の段階を通してデータ収集を実施する多段階混合研究法デザインは、コアデザインを組み合わせた「コンプレックスデザイン」(Creswell & Plano Clark, 2018)の一つとされる。一方、本研究で採用した複合的デザインは、同じパラダイムに属する調査法を組み合わせた「マルチメソッド」と、異なるパラダイムの調査法を組み合わせた混合研究法の両方の要素を併せ持った「マルチメソッド・混合研究法」(multimethod mixed methods: MMMR) (Hesse-Biber et al., 2015)であるといえる。

【混合研究法への示唆】

本研究は、教材開発を目的とする「多段階混合研究法」の枠組みを用いており、探索的な研究や理論生成に対してよりオープンな「質的研究主導型」のアプローチを探っている (Hesse-Biber et al., 2015)。さらに本研究は、日本の看護学研究者から収集したインタビューデータをもとに、次の段階であるデルファイ調査の第 1 ラウンド用に、混合研究法のエキスパートを対象としたインタビューガイドを作成している。このことから本研究は、”QUAL→QUAL”への「積み上げ」の要素を含むデザインとなっている。このため本研究は、「質的研究主導型マルチメソッド混合研究法(MMMR)アプローチ」 (Hesse-Biber et al., 2015)の一事例であるとも言える。

【参考文献】

- Creswell, J.W., & Plano Clark, V.L. (2018). *Designing and conducting mixed methods research (3rd ed.)*. Sage.
- Hesse-Biber, S. N., Rodriguez, D., & Frost, N. A. (2015). A qualitatively driven approach to multimethod and mixed methods research. In S. N. Hesse-Biber & R. B. Johnson (Eds.), *The Oxford Handbook of Multimethod and Mixed Methods Research Inquiry* (pp. 3-20). Oxford University Press.

演題：看護研究者のための MMR 教育モデルの構築－混合型デルファイ調査法を用いて－
著者：抱井 尚子¹⁾、高木 亜希子¹⁾、阿部 路子¹⁾、眞壁 幸子²⁾、大河原 知嘉子³⁾、成田 慶一⁴⁾、亀井 智子⁵⁾

所属：1)青山学院大学 2)秋田大学 3)東京医療保健大学 4)京都大学 5)聖路加国際大学

本発表の専門分野：研究法、看護研究

【背景】1950 年代に、特定の課題に対する専門家集団の見解を集約する目的で開発されたデルファイ法は、今日ではその価値が科学的にも実践的にも様々な分野において認められている(von der Gracht, 2012)。日本の看護研究においても、近年デルファイ法の使用が飛躍的に増加している(藤田他, 2017)。伝統的なデルファイ調査では、専門家に対する匿名の量的アンケート調査の実施およびその結果の提示が合意に近づくまで数回くり返される。一方、海外においては、アンケート調査法のみならず、インタビュー調査法も併用してデータ収集を行う混合型デルファイ調査(mixed methods Delphi study)の利用がこのところ散見されるようになった。本発表は、海外の専門家集団が有する混合研究法教授法に関する見解を集約する混合型デルファイ調査の中間報告である。デルファイ調査の結果をもとに、研究班は混合研究法教育モデルを構築し、これを e-ラーニングの開発に繋げる予定である。

【方法】混合型デルファイ調査の第 1 ラウンドとして、合目的的にサンプリングした専門家集団 5 名に対する個別インタビューを 2021 年 10 月～12 月に実施した。インタビューデータの分析結果にもとづき、第 2 ラウンド用の質問紙票（教授法に関する 43 項目、学修リソースに関する 4 項目、属性に関する 15 項目）を作成した。合目的的サンプリングにより抽出した、混合型研究をトップジャーナルに出版している海外の看護学研究者合計 65 名に調査協力を要請するメールを 2022 年 3 月～4 月に送信し、結果として 14 名より全項目への回答を得た（有効回答率 21.5%）。

【結果・考察・結論】オンラインサーベイを用いたデルファイ調査第 2 ラウンドで収集した混合研究法の教授法に関する 43 項目を記述統計により分析した。コンセンサスを合意率 51% 以上と定義し、学士号取得看護師、修士課程、および博士課程レベルの 3 レベル別に項目を絞り込んだところ、各レベルで異なる数の項目が残った（学士号取得看護師レベル 11 項目、修士課程レベル 24 項目、博士課程レベル 26 項目）。

【混合研究法への示唆】コンセンサスを得た項目数にみられるレベル別の差異は、どのような対象に対し、どのような点を重視して混合研究法の教育が実施されるべきかに関するエキスパートの見解を表すものである。その顕著な傾向として、混合研究法は飽くまで研究者を目指す者が学ぶべき調査方法であるという共通認識が存在することが明らかになった。今回の結果にもとづき、引き続きデルファイ調査の第 3 ラウンドを進めていく。

【参考文献】藤田優一・植木慎悟・北尾美香他 (2018) .看護師を対象とするデルファイ法を用いた国内文献の研究手順の実態 武庫川女子大学看護学ジャーナル, 3, 35-42.

von der Gracht, H.A. (2012). Consensus measurement in Delphi studies review and implications for future quality assurance. *Technological Forecasting & Social Change*, 79, 1525–1536.

投稿論文
募集！
2023年8月
特集号

ANNALS OF MIXED METHODS RESEARCH | 混合研究法 |

2022年4月、日本混合研究法学会は、

学会誌「混合研究法:**Annals of Mixed Methods Research (AMMR)**」
を創刊いたしました

- AMMRは、日本混合研究法学会が発行する、混合研究法に関する**日英二言語対応のオープンアクセスジャーナル**です。混合研究法に関連する幅広い分野の研究がスコープ
- J-STAGEから誰でもご覧になれます。
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ammr/-char/ja>

2023年8月号特集

“MMR Novice and Emergent Researchers”

投稿論文募集！ 日本語・英語いずれも可能です

(論文提出: **2023年1月31日締め切り**)

投稿規定は日本混合研究法学会のウェブサイトをご覧ください

<http://www.jsmmr.org/journal.html>

	投稿料	掲載料
学生会員 (単著であること)	5,000円	20,000円
正会員 (著者会員が正会員であること)	10,000円	30,000円
非会員 (著者の中に非会員が一人でも含まれる場合)	10,000円	100,000円

JAPAN SOCIETY
FOR MIXED METHODS RESEARCH

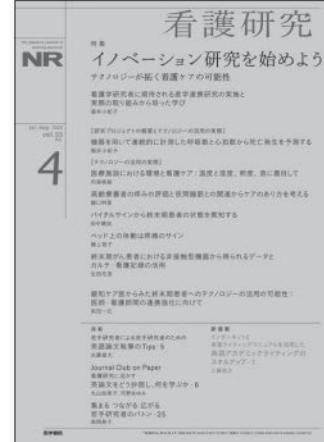
雑誌 看護研究 のご案内

隔月刊(偶数月)
通常号定価:2,200円(税込)
★お得な年間購読をお勧めいたします。

研究の充実がますます欠かせない時代。看護とは? 研究とは? という原点を見つめながら、変わらない知を再発見し、変わりゆく知を先取りしながら、すべての研究者に必要な情報をお届けします。誌面を通して、看護学の知と未来をともに築きたいと考えています。

2022年の特集

- No.5 地元から看護学を創る—「地元創成看護学」の可能性
- No.4 イノベーション研究を始めよう テクノロジーが拓く看護ケアの可能性
- No.3 「ケアの意味を見つめる事例研究」の実践への拡がり
- No.2 批判的実在論とは何か
- No.1 理論をつくる・つかう・つたえる——実践にいきる理論構築に向けて



質と量とを統合する、研究法の新たな潮流

混合研究法入門 質と量による統合のアート

抱井尚子

混合研究法の概要と歴史的発展をおさえつつ、その研究プロセス・研究デザインを、実際の研究事例をmajieながらわかりやすく解説、混合研究法の意義とこれからの展望を示す。

●四六版 2015年 頁148 定価:2,200円(本体2,000円+税) [ISBN978-4-260-02470-9]



定本
M-GTA

実践の理論化をめざす質的研究方法論

木下康仁

体系的に解説された初めての本格的テキスト
M-GTA
修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ
決定版! 実践的進歩に取り組む
すべての人に

M-GTA(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)の決定版

定本 M-GTA

実践の理論化をめざす質的研究方法論

木下康仁

質的研究方法論の1つとして広く知られるM-GTAの決定版。M-GTAの基本的な考え方と研究方法のプロセスを具体的かつ詳細に解説し、理論面と実践面から強力にサポート。

●A5 2020年 頁400 定価:3,520円(本体3,200円+税) [ISBN978-4-260-04284-0]



医学書院

〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23 [WEBサイト]<https://www.igaku-shoin.co.jp>
[販売・PR部]TEL:03-3817-5650 FAX:03-3815-7804 E-mail:sd@igaku-shoin.co.jp



質的データ分析研究会

テキストデータや動画、音声、文献などの質的データ分析に取り組む方を支援するため、2019年より活動を開始しました

取り扱いソフトウェア製品



質的データ分析支援サービス

トレーニング / ワークショップ：

NVivo、MAXQDA の入門コースをオンラインで定期開催する他、ご要望に応じた個別講習も承ります

アドバイザリー：

NVivo や MAXQDA、KH Coder などのツール操作や使い方を個別にご相談いただけます

MAXQDA 2022 トレーニングテキスト：

自習用、復習用にも使えるテキストを制作中
(2022年秋より販売予定)

ビデオ・オンデマンド：

ソフトウェアの操作解説やセミナー収録映像をレンタル視聴

● **ありそうでなかった QDA ソフトの話**：NVivo や MAXQDA を使った研究体験から、ソフトの活用を考えるセミナー収録版

● **テキスト分析～いろはの「い」～**：日本語処理の仕組みなどテキスト分析の基礎を、KH Coder 等で例を示しながら初心者向けに解説

● **NVivo 入門**：NVivo を研究に使い始めたい方向けに使用方法をテーマごとに解説

その他、分析支援や勉強会事務局の代行など、まずはご相談ください！

— 質的データの分析に取り組む方のための Web サイト —

ソフトウェアの使い方やデータ分析のヒント、参考書籍やイベント情報など

www.qdaa.info



質的データ分析研究会 Lab SASO

〒 170-6001 東京都豊島区東池袋 3-1-1 サンシャイン 60 MBE608 Email: info@qdaa.info

アカデミックライセンスあり

多彩な分析機能によって、質的研究、量的研究、混合研究法を総合的に支援する

Text Mining Studio®

看護記録やアンケート、闘病手記など日本語文章の分析に！

	A 患者名	B 性別	C 年齢	D 症状	E インタビュー年月日	F 要介護度	G インタビュー内容
1	患者名	性別	年齢	症状	インタビュー年月日	要介護度	インタビュー内容
2							

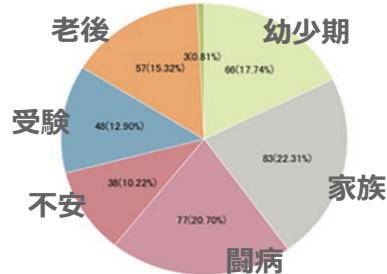
『テキストマイニング』では、エクセルでは集計しきれない『文章』部分を分析します。

▼属性（男女、症状など）ごとに出現することばとその頻度

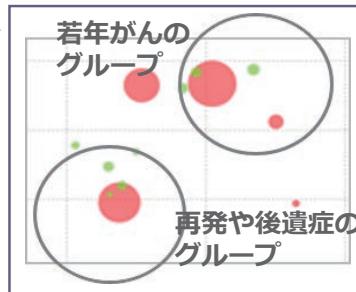


↑気になる単語を含む文章をその場で原文参照可能

頻度解析のような基本的な分析はもちろん、カテゴリー分けや対応分析なども簡単な操作で実現できます。様々な表・グラフをすぐに作成でき、そのまま論文に掲載可能です。



がん患者の手記から
がんのタイプによる
グループと傾向を見る



▲自動分類機能を使えばカテゴリー分け作業の負担を軽減

◆ テキストマイニングに必要とされる機能を網羅 ◆

■ 分析機能一覧

- ・ 単語頻度分析・係り受け頻度分析・共起・時系列推移
- ・ グルーピング・注目語分析・特徴語分析・評判抽出
- ・ 文章分類・対応バブル分析・ことばネットワーク

● 当社製データマイニングツール等と連係し、より深い分析も可能です。 ● 研究用にアカデミックライセンス価格もあります。

ユーザー様論文・ご著書公開中

<https://www.msi.co.jp/tmstudio/academic.html>

テキストマイニングについてやさしく解説した『読本』の

<https://www.msiism.jp/ebook.html> 電子版を無料公開中！

■ テキスト処理一覧

- ・ 分かち書き・辞書・属性加工・原文参照
- ・ データフィルタリング・HTMLレポート出力
- ・ プロジェクト読み込み保存・結果出力と印刷

Text Mining Studio
無料紹介セミナー毎月開催！
無料トライアル受付中！
vmstudio-info@ml.msi.co.jp

お問合せ先

NTT DATA 株式会社 NTTデータ数理システム 営業部

〒160-0016 東京都新宿区信濃町35番地 信濃町煉瓦館1階

✉ E-mail: vmstudio-info@ml.msi.co.jp ☎ 03-3358-6681

FAX: 03-3358-1727 【URL】<https://www.msi.co.jp/tmstudio> お問い合わせ: 平日10:00-16:00 (E-mail、FAXは随時受付)

SAGE researchmethods

SAGE Research Methods は、研究方法の“オールインワン”リソースです。1,000冊以上の書籍や参考図書、学術論文のほか、実際の研究プロジェクトに基づく2,300以上のケーススタディ、実践的にデータ分析を学習するための600以上のデータセット、研究方法やスキルを学ぶことができる1,500編以上の動画を収める5つのコレクションを収録しています。また、研究の遂行を支援する**Research Tools**も備えています。^{*}

質的・量的・
混合研究法を
幅広く
カバー

オンライン
授業やリモー
ト環境での
自主学習にも
最適



より
初学者向けの
Foundations
も新たに
追加！

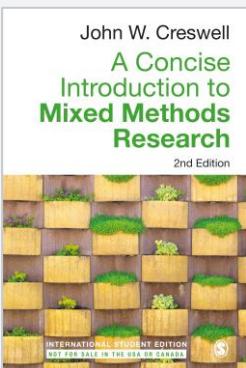
著名研究者に
によるチュート
リアルや
インタビュー
動画

*SAGE Research Methodsのすべての
モジュールを購読した場合のコンテンツ数。

methods.sagepub.com

混合研究法学会関連 注目タイトル

John W. Creswell 著



A Concise Introduction to Mixed Methods Research Second Edition (International Student Edition)

2021 | 9781071840962 | £22.99

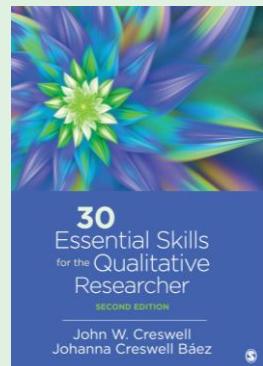
初学者や、多忙な看護・医療実務者のために、混合研究法についてコンパクトにまとめる定番入門書、待望の第2版！混合研究法最初の1冊としておすすめ。

John W. Creswell 共著

30 Essential Skills for the Qualitative Researcher Second Edition

2020 | 9781544355702 | £34.99

研究中の困難な感情への対処、データ分析のノウハウなど、基礎スキルを具体例をもとに惜しみなく伝授する、質的研究者のための実践的なガイドです。



稻葉光行、抱井尚子、グレゴリー・ハドリー 共著



Bryant & Charmaz 編
The SAGE Handbook of Current Developments in Grounded Theory

2019 | 9781473970953 | £130.00

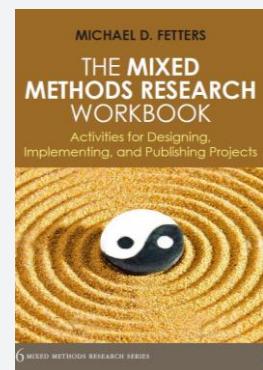
シャーマズほか編、グラウンデッドセオリーの歴史、理論、実践、今後の展望について、全6部・31章で解説する決定版ハンドブック！

Michael D. Fetterly 著

The Mixed Methods Research Workbook : Activities for Designing, Implementing, and Publishing Projects

2019 | 9781506393599 | £34.99

混合研究法を用いた研究実践のあらゆる段階をサポート。書き込みながら学ぶワークブック形式のテキストです。



最新情報は Twitter @sagepubjapan をご覧ください！

研究者の皆さまの より良い研究をご支援します

SMART RESEARCH SUPPORT



より質の高い研究を トータルサポート

研究者の皆様の論文作成や学会発表、日々のご研究における統計処理やデータ分析をはじめとする様々な課題やお悩みを寄り添いながらサポートさせていただきます。研究デザインや統計解析手法に関するアドバイスを実施する「研究デザインサポート」、「データ分析個別サポート」や研究調査における調査設計から郵送調査やWeb調査、データ入力から集計・分析までを代行する「アンケート調査パッケージ」、統計解析ソフトの使い方や統計学習をサポートする「データ分析教育サービス」など、より質の高い研究や教育をサポートする「スマート・リサーチ・サポート」を提供しております。

スマート・アナリティクス株式会社

0120-290-210 / 03-5786-6620

jpsales@smart-analytics.jp

<https://smart-analytics.jp>

東京都港区南青山3-8-2
サンブリッジ青山3F



研究デザインから調査 データ分析まで



研究デザイン／分析デザイン支援

量的データを利用した研究計画書や倫理審査用資料の作成に関してご支援いたします。経験豊富な専門スタッフが研究デザインや分析デザインについて個別アドバイスを提供します。



アンケート調査サポート

アンケート調査を実行する前の調査設計や調査項目の選定、調査票作成から郵送調査からWeb調査の実施。データ入力から分析用ファイルの作成や基礎集計、多変量解析など調査全般をサポートします。



データ分析ソフトウェア提供

SPSSをはじめとする統計解析ソフトウェアを提供。お客様一人ひとりに最適な分析ソフトウェアをご提供します。



データ分析個別サポート

収集したデータをどのように分析をするのか個別にアドバイスを提供する個別サポートからすべて分析を任せることも可能な受託分析サポートまで対応。

北大路書房

〒603-8303

京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393
<https://www.kitaohji.com>(価格税込)

質的研究ハンドブック(全3巻)

N. K. デンジン他著/平山満義監訳 定価5060円~6160円

人間科学のための混合研究法

J. W. クレスウェル、V. L. ブラノクラーク著/大谷順子訳 定価3630円

教育研究のための質的研究法講座

関口靖広著 定価3080円

質的研究をはじめるための30の基礎スキル

—おさえておきたい実践の手引き

J. クレスウェル&J. バイス著 廣瀬眞理子訳
A5判並製 432頁・定価 5,060円
ISBN 978-4-7885-1769-1

質的研究者のように考えることから、研究に際しての感情的側面、リサーチクエスチョンの設定、インタビューやデータ分析のノウハウ、論文を書くプロセスまで、混合研究法の第一人者が実践に役立つ30の基礎スキルを豊富な具体例とともに伝授する。



ワードマップ

心理検査マッピング

—全体像をつかみ、臨床に活かす

鈴木朋子・サトウタツヤ編
四六判並製 296頁・定価 3,080円
ISBN 978-4-7885-1785-1



実践の場でよく使用される41の心理検査について、開発者や使用経験豊かな研究者が解説し、文化×個人、文化×集団、自然×集団、自然×個人の4つのマトリクス上にマッピングしてその特徴を検査の全体像の中で捉えた、これまでにない入門書。



新曜社

〒101-0051 東京神田神保町3-9 〈税込〉
TEL 03-3264-4973 (代表) / FAX 03-3239-2958

日本混合研究法学会会員限定 15%OFF !

詳細は左記QRコードにて。 2022年11月15日まで

人間科学のための混合研究法

—質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイナー J. W. クレスウェル、V. L. ブラノクラーク著 大谷順子訳 A5・328頁・定価3630円 研究プロセスの各段階において、質的・量的アプローチでデータを収集・分析・混合し、各々のアプローチの長所を組み合わせることをめざした研究方法論。

心理学ベーシック 第5巻 なるほど！心理学面接法

三浦麻子監修 米山直樹、佐藤 寛編著 A5・272頁・定価2640円 心を深く探ることができます研究法であるが、対象者と直接関わるための臨床的な技術が求められる難しさがある。本書では、アセスメントで求められる技術と方法、面接データの解析、臨床面接法について体系的に概説し、研究および臨床の両軸を念頭に広く深い視野の提供を目指す。

校内研究の新しいかたち

—エビデンスにもとづいた教育課題解決のために— 小泉令三、西山久子、納富恵子、脇田哲郎著 A5・192頁・定価2750円 文章の書き方などの初步にくわえて簡単な統計処理なども扱う研究入門マニュアル。日々の指導を学校変革へつなげるヒントを提供。見開き2頁でポイントを具体的に解説。

教育研究のための質的研究法講座

関口靖広著 A5・256頁・定価3080円 現場教員にもわかりやすい教育現象の質的な研究法の手引書。前半の入門編では、専門用語を使わずに具体的な研究の進め方を概説。より専門的な理論や研究法のテクニックは後半の各論編にまとめられ、必要に応じて関心のあるところをピックアップして読めるようになっている。

質的研究用語事典

T. A. シュワント著/伊藤 勇他監訳 定価3520円

なるほど！心理学観察法

三浦麻子監修／佐藤 寛編著 定価2420円

〈当事者〉をめぐる社会学

宮内 洋、好井裕明編著 定価3080円

質的データの取り扱い

L. リチャーズ著/大谷順子、大杉卓三訳 定価3520円

心理学マニュアル 観察法

中澤 潤、大野木裕明、南 博文編著 定価1430円

ナラティヴ・アプローチの理論から実践まで

G. モンケ他編/国重浩一、バーナード著訳 定価2860円

ワードマップ

質的研究法マッピング

—特徴をつかみ、活用するために

サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編
四六判並製 292頁・定価 3,080円
ISBN 978-4-7885-1647-2



代表的な26の質的研究法を取り上げ、それぞれの特徴を概観できるよう四象限マトリクスを用いて整理(マッピング)し、第一線の研究者が解説。方法論的基礎や、新しい動向もカバー。最良の方法を選んで活用するためこれまでにない入門書。

SAGE
質的研究キットシリーズ
好評既刊

1 質的研究のデザイン

U. フリック著/鈴木聰志訳 A5判並製 196頁・定価 2,310円

2 質的研究のための「インター・ビュー」

S. クヴァール著/能智正博・徳田治子訳
A5判並製 272頁・定価 2,970円

3 質的研究のためのエスノグラフィーと観察

M. アングロシーノ著/柴山真琴訳
A5判並製 168頁・本体 1,980円

4 質的研究のためのフォーカスグループ

R. バーバー著/大橋靖史ほか訳 (※近刊)

5 質的研究におけるビジュアルデータの使用

M. バンクス著/石黒広昭監訳 A5判並製 224頁・定価 2,640円

6 質的データの分析

G. R. ギブズ著/砂上史子・一柳智紀・一柳 梢訳
A5判並製 280頁・本体 3,190円

7 会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析

T. ラブリー著/大橋靖史・中坪太郎・綾城初穂訳
A5判並製 224頁・定価 2,640円

8 質的研究の「質」管理

U. フリック著/上淵寿訳 A5判並製 224頁・定価 2,640円



混合研究法の手引き
トレジャーハントで学ぶ
研究デザインから論文の書き方まで
マイク・D・フェアーズ／抱井尚子 編
混合研究法の手引き
トレイヤーハントで学ぶ
研究デザインから論文の書き方まで
マイク・D・フェアーズ／抱井尚子 編

混合研究法の手引き
トレジャーハントで学ぶ
研究デザインから論文の書き方まで
マイク・D・フェアーズ／抱井尚子 編
優れた研究論文を10のポイントを押さえて読み解くことで、混合研究法を行うためのノウハウがよく分かる。質的研究と量的研究のハイブリッドであり、実に迫る混合型研究の進め方を、宝探し感覚で学べるユニークな入門書。さあ、あなたも本書をガイドに混合研究法の世界に乗り出そう！ 2,860円、B5並



混合研究法への誘い
質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ
日本混合研究法学会
抱井尚子・成田慶一
JSMMR ■ INNOVATION FOR RESEARCH DESIGN

混合研究法への誘い
質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ
日本混合研究法学会
抱井尚子・成田慶一
JSMMR ■ INNOVATION FOR RESEARCH DESIGN

混合研究法への誘い
質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ
日本混合研究法学会監修／抱井尚子・成田慶一編
混合研究法の哲学的・歴史的背景から、定義、デザイン、研究実践における具体的なノウハウまでがこの一冊でよく分かる。質的研究と量的研究の単なる併用からシナジーを生み出す統合を目指す、知識の本質を問う新しい科学的アプローチ「混合研究法」への招待。
2,640円、B5並



がんと嘘と秘密
ゲノム医療時代のケア
小森康永・岸本寛史著
がん医療に深く携わってきた二人の医師による、嘘と秘密を切り口にテキストと臨床を往還しながら、客観性を重視する医科学的なアプローチを補うスリリングな試み。2,420円、四六並



新型うつ
とはどうなのか
新しい抑うつの心理学アプローチ
(日本大学教授) 坂本真士 編著
新型うつは怠惰なのか病いなのか？ この本は、新型うつを臨床心理学と社会心理学を軸に研究をしたチームによる、その原因と治療法、リソースなどを紐解いた1冊。2,200円、四六並



ひきこもりと関わる
日常と非日常のあいだの心理支援
(跡見学園女子大学准教授) 板東充彦著
本書は、セルフヘルプグループ支援などの実践を通して模索してきた、臨床心理学視点からのひきこもり支援論です。コミュニティで共に生きる仲間としてできることは何か。2,530円、四六並



学生相談カウンセラーカンパスの危機管理
効果的な学内研修のために
全国学生相談研究会議編 (杉原保史ほか)
本書は、学生相談カウンセラーたちがトラブルの予防策や緊急支援での対応策を解説。学内研修に使える13本のプレゼンデータ付き。3,080円、A5並



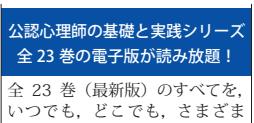
臨床力アップのコツ
プリーフセラピーの発想
日本プリーフサイセラピー学会編
臨床能力をあげる考え方、スキル、ヒントなどをベテランの臨床家たちが開陳。また黒沢幸子氏、東農氏という日本を代表するセラピストによる紙上スーパービジョンも掲載。3,080円、A5並



動作訓練の技術とこころ
障害のある人の生活に寄りそう心理リハビリテーション
(静岡大学教育学部教授) 香野毅著
身体・知的・発達障害のある人の生活に寄りそう動作訓練をプロフェッショナルが伝授。導入から訓練中の着目点、実施の詳述＋実際の訓練の様子も写真入りで解説している。2,420円、A5並



ACTマトリックスのエッセンシャルガイド
アクセプタンス＆コミットメント・セラピーを使う
K・ボーケラ著／谷晋二監証
本書は、理解の難しいACT理論を平易に解き明かし、実践に役立てられる1冊で、誰でも明日から使える手引きとなっている。15種類のワークシートつき。5,390円、A5並



公認心理師の基礎と実践
全23巻 大好評!!
23巻完結！ 監修 (九州大学名誉教授)・(東京大学名誉教授)
野島一彦・繁栄算男
遠見書房では公認心理師カリキュラムに沿った全23巻にわたるテキスト・シリーズを刊行しています。編者・執筆者は、各領域の最高の研究者・実践家に依頼をしました。各2,200円～3,080円



公認心理師基礎用語集 改訂第3版
必携・必読のキーワード集!
新規用語を収録!
試験範囲であるブループリントに準拠したキーワードを138に厳選。必読の国試対策用語集です。2,420円、四六並



N: ナラティヴとケア
新しい価値観を創出する臨床誌
B5判、110頁 定価1,980円
年1回(1月発行)

第8回日本混合研究法学会年次大会

【大会長】

稻葉 光行 (立命館大学政策科学部)

【実行委員長】

眞壁 幸子 (秋田大学大学院医学系研究科)

【実行副委員長】

前原 和明 (秋田大学教育文化学部)
須田 智美 (秋田大学大学院医学系研究科)

【実行委員】（※五十音順）

赤川 祐子 (秋田大学大学院医学系研究科)
井上 真智子 (浜松医科大学地域家庭医療学講座)
大河原 知嘉子 (東京医療保健大学千葉看護学部)
抱井 尚子 (青山学院大学国際政治経済学部国際コミュニケーション学科)
亀井 智子 (聖路加国際大学大学院看護学研究科)
河村 洋子 (産業医科大学産業保健学部)
香曾我部 琢 (宮城教育大学教育学部)
高階 淳子 (秋田大学大学院医学系研究科)
田島 千裕 (学習院女子大学国際文化交流学部)
成田 慶一 (京都大学大学院医学研究科)
野崎 真奈美 (順天堂大学大学院医療看護学研究科)
八田 太一 (静岡社会健康医学大学院大学)
福田 美和子 (目白大学看護学部)
宗村 暁子 (秋田大学大学院医学系研究科)

【抄録集編集員会】（※五十音順）

赤川 祐子 大河原 知嘉子 高階 淳子 前原 和明* 真壁 幸子 宗村 暁子

*委員長

【主催】

日本混合研究法学会 (JSMMR)

【協賛・助成】

- ・科学研究費補助金 基盤研究（B）課題番号：20H03966 「看護研究における混合研究法教育用ガイドブックの開発とeラーニングの構築」（研究代表者：抱井尚子）
- ・青山学院大学混合研究法教育開発センター

【主催】

日本混合研究法学会
<http://www.jsmmr.org/>

